

## 第 16 回高等学校改革プラン推進委員会（第四推進委員会）議事録

- 1 日時 平成 18 年 1 月 9 日（月）午前 9 時 00 分～午後 0 時 00 分
- 2 場所 長野県松本勤労者福祉センター 3 階 第 7 会議室
- 3 出席委員

中條 利治委員長	野口 廣子委員
百瀬 哲夫副委員長	小山 勉委員
小口 利幸委員	丸山 哲弘委員
宮川 正光委員	藤本 光世委員
神澤 鋭二委員	長谷川 功委員
今井 隆一委員	鈴木 義明委員

### 4 開会

（西牧主任教育支援主事）

本日は 3 連休の最終日にもかかわらず、朝早くからお集まりいただきまして誠にありがとうございます。今日の会議は最終報告の確認を行うことになっておりますが、この第四推進委員会は原則公開ということで、最終報告書の原案を報道関係も含め傍聴者の方々にもすでに配布してあります。

それでは委員長さんよろしくお願いします。

（中條委員長）

それでは改めまして、明けましておめでとうございます。新年 2006 年、明けまして第 1 回目の都合 16 回目の推進委員会になります。

今、事務局からもありましたように、本日は最終報告書の取りまとめに向けて、確認をということで進めていきたいと思えます。それから事前に一部の方かもしれませんが、事務局からあくまでこれは原案ですから、この通りに決まるかどうかは別として、最終報告について公開するという事でよろしいかということで、お話しをさせていただいております。特にそれについてご意見、ご異議がある方いらっしゃれば、よろしいでしょうか。

それでは傍聴の方々も、これはあくまで原案ですから、これから確認をして参りますので、場合によりましたら内容等修正をいたしますので、そのつもりでぜひよろしくお願いしたいと思います。

それでは最初に資料 1 で、前回の 15 回の中で質問等がありまして、その場で回答をいただけなかった分、事務局で確認いただいた内容がお手元にお配りされていますので、それについて始めにご説明いただけますでしょうか。お願いします。

### 5 資料説明

高校教育課西牧主任教育支援主事より説明 【説明内容省略】

## 6 議事

(中條委員長)

ありがとうございます。

部活動の加入については、お聞きしましたところ、母子家庭のお子さんが 30 数名いらっしゃる、従って 20 数パーセントの方々は、部活動が出来ないような状況にあるように聞いております。そういう意味で、多少全県的な状況と比べるとその辺も加味しないと、単純に数字だけでは見誤るかもしれません。

これについて何かご質問等はございますか、よろしいでしょうか。

それでは最初に恒例ですが、前回の委員会 12 月 25 日第 15 回になりますが、それについて最初にまとめをさせていただきます。

前回の個別論議ということで、最初に旧 11 通学区です。松塩にするか南安についての方向づけ等々と、それから実施時期ということで 2 つの議題について議論を進めていただきました。最初に池工について、蘇南高校と同じように総合の選択制への転換について、ご意見を伺いましたが、現状 3 学級の工業高校ということになりますが、特にご意見、ご発言はございませんでした。

それから直接 11 区ということではありませんが、障害児の受け入れについてということ、14 回でそれぞれの推進委員会に、提言いただいた中にありました内容ですが、その提言にあった障害児の受け入れについて、特に定時制で受けるといったのが、松本地区外ですが、多部制に転換するほどは難しくないことはないかというご質問がありました。これにつきましては県教委からは、養護学校は県内 10 圏域に分け、順次ということですが、各地区の高校に分教室を設置するという方向ということで、また多部制に転換しても、これまでの定時制同様、少人数学級等の工夫により可能であれば、今までどおりに対応していきたいという回答がありました。

それから松本筑摩の全日制 3 学級分の廃止に伴い、普通科配分について 5.5 ないし 6 を下回る普通高校に、配分したらどうかというご意見、また 5.5 は平均値であり小規模校もあるので都市部校は、8 学級規模の高校も必要である。筑摩の全日制には、平成 16 年で見ると大北出身者はゼロであり、出身等の実態を踏まえて検討すべき等のご意見等々ございました。

大北についてはこれまで県教委としての応募状況の推移や生徒数流入等の実態を踏まえて対応してきており、この 3 学級の扱いも県教委が担ってはどうかと、ということで委員会としての合意を見ております。

それから南農と穂高商業の、ジョイント校化につきましては、大系線地元経済と高校配置のアンバランスがあるのではないかと、それからこのままでは両校の小規模校化がかなり懸念される、また高校関連携として以前説明があった、須坂園芸と須坂商業が同じ農、商であり、具体的にはどんな内容かのご質問がありまして、具体的などころまでは、その段階ではわかりませんでしたが、2、3 科目の連携がとられている。1 科目は週 2、3 時間ということで、1 年間実施して双方の単位を履修し単位認定が可能であると説明がありました。

また農、工、商はどうしても単独型では小規模にならざるを得ないという意見、また専門校は実習等もあり大規模化をすると難しい面もある、普通高校と異なりコンパクトのほうがいい面があるというご意見がありました。また資格取得も考えると、必然的に一生懸

命に勉強に取り組むのではとのご意見がありました。

それから南農も、従来の農業科からの脱皮を試み始めており、農業にこだわらない魅力づくりにより新しい学校になっていく可能性もあり、今後を見守りたい。双方が第4通学区唯一の農業、商業専門校であり、小規模校化が懸念される地域校とは状況が異なる。以上を踏まえ、ジョイント校統合は少数意見であり現状のまま存続で合意を得られた。

今資料配布がありました明科については、県立88番目の高校で、最後の新設校であるとのこと。平成初期のピークをにらみ、校地確保の可能性検討の中で結果的に明科地区にされた。また魅力づけの一番の目的に、4つのコース制を設定しているという話がありました。その中に設立経過に対するも、現状では100数十名が地元ではなく、松本市内からの通学であり、地元は40人足らずである。という現状の披瀝がございました。

多部制については、3部制導入が本当に可能か、2部制のほうが望ましいのではないか、というご意見。3部制であれば、午前・午後の部がそれぞれ中心となり、結果的として夜間部が減ることが予想されるので、むしろきめ細かな指導体制が可能となるのではないかと推測していると県教委から説明がありました。その結果、2部か3部かの議論は、テクニカルの面が中心なので、推進委員会としての議論にはなじまない。我々としての要望としてあれば、報告書に補記し県教委に、検討を委ねるべきであろうということで、一応合意をいただきました。

続いて実施時期について個別論議をしました。これまで実施時期は一応棚上げにしたという前提の中で、それぞれの再編内容に伴って、我々としての実施時期を模索ということですが、その実施時期の決定権について、県教委からは推進委員会の要望を聞くことはやぶさかではないが、賛否両論があることから、最終的には県教委の決定事項であると、とらえている。それに対してそもそも論として、それでは我々の方向づけは一体何なのかというご意見がありました。教科編成とテクニカルの問題もあり、推進委員会の方向づけをとおして、県教委も専門的に検討すべきではないかというご意見。

ということで、決定という意味で言えば、内容によっては最終的には県教委ではなく、むしろ県議会で決定するというものもあろうかと。県教委としても我々の意見を、無視する必要がないと思うので、報告書に我々の強い要望としての、意見を入れることについて一応合意をしました。

それから具体的な実施時期につきましたのご意見、確認をした中でのご意見です。少なくともこれから中学に、進む子どもたちは3年間で新しい再編される高校進学を意識づけるように、3年間の準備期間を置くべきである。ということ。また平成19年実施では、想定して進学したわけではない、今在学中の子どもたちから、高校が変わってしまうという。また子どもたちにとって考えるゆとり、動機づけとして3年間は必要であろうということ。実施にあたっては統合する側だけでなく、される側生徒、学校、地域ということになりますが、その論議も必要ではないか。民間であればスピードが命であり、決めたら即実行であるため、平成19年までは結構長いのではないかとご意見。ただ学校は3年単位なので1年単位で考えてもらっては困るというご意見。一方企業も10年、3年、1年で中期年度計画と連続しており、1年だけで見ているのではない。むやみに時間を掛ければいいというわけではないというご意見。そういう中で統合することでの、魅力づけを遅らせて困るのも、子どもたちではないか、そもそも論としてその共通認識に立っての、

必要最低限としての期間論議をしていくことで合意をいただきました。

そういう中で、案が固まった以上個別に考えるべきだ。大変だと思うが早く実施すべきだが現実として平成 19 年だと、前期選抜が間に合わない可能性もあるのではないかと。一斉に実施することが望ましい。個別にするには納得の出来る状況を見つける。例えば統一学科と異なる学科の統合が必要であろうが、現実としては難しいのではないかとのご意見がありました。

再編案として段階で動ければ、平成 19 年でも良かったかもしれないが、その後推進委員会で 1 年近く議論をしてきたことであり、その意味で 1 年遅らせて、平成 20 年実施でもいいのではないかとのご意見。最終実施年度で再編させる事も可能ではないか、早いところからスタートするという意味合いでのご意見でした。

せっかく盛り上がった意見を、時間をおいて冷ますのは、もったいない気がするということで、その結果個別の実施年策定は案として、個別のそれぞれの統合別に内容を踏まえて、進路を分けたらどうかという案を、私から配ったのですが、それについては同意も少なく、また実施年度は全員の意見を踏まえ、ひとつの方向づけが難しいことから、考え方として要望として、報告書に盛り込みテクニカルの面等を踏まえて具体的な検討は、県教委の計画策定に委ねる事にしようと、いったん合意をいただいております。

前回もお願いしましたように、今回ともう一回を予定しておりますが、16 回以降は最終報告書の確認で、事前に時間の効率を前提に、出来れば一字一句確認したいということも踏まえまして、年末慌ただしい中恐縮でしたが、私からいったん、本当にたたき台という意味での原案を、県教委経由でコピーそしてネットで配信させていただいて、この場で確認していきたいとお願いさせていただいております。

以上が前回の議論、意見の内容になりますが、ここまででのごとく何かございますか。よろしいでしょうか。最終報告に入る前に、何か確認もしくは意見交換しておくべき内容があれば、いただきたいと思いますが特にございますか、よろしいでしょうか。

それでは今日は 12 名の出席をもって進めてまいります。一応今日欠席の 2 人委員さんにも事前に配布をいただき、県教委からこれについて、今日 1 回ですんなりいけるかどうかは別にして、確認をいただきましたが、この 2 人からは特にコメントはいただいておりますので、この出席の方々の中で確認をさせていただきたいと思います。

それでは、お手元にコピーを配布させていただいておりますので、それにそって進めて参ります。最初に体裁については、4 つの推進委員会、最終的には体裁をそろえるということも、あるかもしれませんが、今のところ特に体裁についての指示、項目立て、構成についての指示もいただいておりますので、実際お送りした中で、少しふれましたように、前回私が伺いました教員評価の検討委員会の、内容に沿っていったんまとめてあります。従って表題からまとめ方については、多少最終的に変わるかもしれませんが、いったんそんな感じでまとめたということで、ご理解いただければと思います。

それから、左側に今日はあくまで確認用にとということで、分かりやすいように行番号をふっております。最終報告からは行番号は取りますが、今日は何ページの何行目という事で、確認がしやすいように行番号をふりました。

最初に項目立て構成からですが、一番最初に「始めに」で、これまでの検討を踏まえて全体の状況。2 番目として「方向づけにあたっての当推進委員会の基本スタンス」という

ことで、我々がこれまで15回をかけて、当初の魅力づけから始まって確認してきた内容を、大筋まとめています。これが3ページにまでいきまして、3ページの途中から再編案ということで、書き込みすぎということがあるかもしれませんが、いったんたくさん書いたところから消していくほうが、後から追加していくより楽だろうという前提で、もしかしたら必要以上ということかもしれませんが、できるだけ対象となる高校だけではなくて、議論があったものすべてを、盛り込みたいということを前提で、全20校の名前は全部ちりばめたつもりであります。まとめてということも、ないわけではありませんが、その前提で再編案は書きました。

特に我々として、方法という意味で特徴的なところは、アンダーラインを引いてあります。地域ごとに検討してきたことを踏まえて、第10区、11区、12区という順番でまとめました。それから各項目については1番からの通し番号にしてあります。4番目として前回議論しました実施時期について。それから、5番目としては、これは必要か不要かという意見もあるかと思いますが特徴的な少数意見をここにまとめました。

それから最後、そこにも趣味嗜好ということで、ご批判もあるかもしれませんが、最後までめたいということで、まとめてございます。

最後に、すいません。私がコピーミスでお名前が違ったものもあって、最初配信した中では行ってしまった気がします、申し訳ございません。それとは別に第四推進委員会の委員ということで、これは事務局でおつくりいただいたものを、最終ページにつけたというものが全体の構成になります。

それで今日、これから確認いただきたいわけですが、確認いただくスタンスとして、ひとつは議論の蒸し返しではなく、これまで15回の議論のまとめとして、我々の議論してきた内容の整合性を、ぜひ確認をしていただきたいということ。

2番目として、従って賛同を得られなかった個別展開を、ここで繰り返すということは、できるだけ避けていただきたい。2番目に申し上げた単なる個人的な見解という意味ではなくて、仮に少数意見であっても、最終報告に盛り込むべきもの、またはその内容の確認の場としたいということ。

最後、全員の合意が得られなかった内容は、報告書には盛り込まない前提で私の判断で勝手に少数意見も入れてありますので、ぜひまたそれも要不要の判断も含めて確認をいただきたいと思います。ここまで何かご意見ございましたら、お願いします。

よろしいでしょうか。それからお手元にありますコピーですが、年末に事務局からお送りいただいたもの以降、字句の訂正、間違い等ございまして、それについては少し解りづらくて恐縮ですが、二重線で消してその後ろに新しい言葉を入れてあります。私の手元のものは赤字にしたのですが、モノクロコピーのため読みにくいかもしれません。一応二重線が入っているところが、前回送付、配信させていただいたものから、変更があるということで見いただければと思います。それでは、ここまで何か疑問よろしいですか。

では、先に言いましたスタンスで、進めさせていただきます。それでは構成のことは別にして、内容について読み上げて、それを確認する形で進めて参ります。

まず1番、読みます。初めに本第四通学区推進委員14名は、長野県教育委員会（以下県教委）からの最初「命」とありましたこれを二重線で消しまして、「委嘱」に変えてあります、からの委嘱を受け、委員会として平成17年5月29日より（まだどうなるかわかりま

せんが、いったん予定では)平成 18 年 1 月 14 日の最終回まで、都合 17 回の推進委員会を開催し、それぞれの出身母体にはかかわらず、できる限り客観的公平なかつ公正な議論を重ねていった。当委員会としては、県教委からの再編案の提示を踏まえ、その内容や環境を十分理解する中で、それにとらわれず広範な検討をしてきたつもりである。ここに我々としての結論を出すに至り、委託された項目を満たし、かつ我々の思いを込めて、最終報告とするものである。

なお、我々第四推進委員会の責任として、詰めに至らず複数案併記ではなく、県教委から依頼された、報告期限内での結論づけを目指した結果、内容的には具体化の検証において、不十分なものも決してないわけではないが、是非提案の趣旨・方向性を踏まえ、事務局である県教委として今後、具体化に向けての真摯な検討を強く要請する次第である。

ここまでで何かご意見ございましたら、お願いします。修正したところは先ほどの、委嘱に変えたところと、とばしましたが次の行 1 月 15 日と、最初は書き入れてしまいました、14 日ですので 1 月 14 日と変更しました。

ここまでで何かご意見ございますか。

(鈴木委員)

この原案が出たおかげで、今までの議論がとてもまとまって、ここまで来たと思います。この原案についてまず 1 カ所ですが、細かいかもしれませんがよろしいですか。

(中條委員長)

細かいことも確認をしたいので。

(鈴木委員)

4 行目ですが、「その内容や背景を十分検討する中で」という文言ですが、その次の「とらわれず」とのつながりの問題と、私が引っかかっているのは再編候補案の中には木曽高校を木曽山林にということについては事務局の説明も十分でなかったし、我々も十分理解をしないまま、議論したなと思うのですね、従ってこの文章は「再編提示案を踏まえながらも、それにかかわる」という文言にしたほうがいいのでは、というところです。

(中條委員長)

今のご意見についていかがでしょうか。一応左に行番号をふりましたので、今鈴木委員からの意見は 11 行のところの、「当委員会としての県教委への再編案提示を踏まえ」という部分について、具体的には再編案は木曽高校を木曽山林高校に統合すると、それに対して再編案説明という中で事務局から十分な、我々がいいかどうかは別にして、そこに込められた思いというのを、十分にすることはできなかったの、言葉的にみれば踏まえてではなくて、踏まえながらもということで、「ながらも」を入れたらどうかというご意見ですが、ご意見あればお願いします。いかがでしょうか。

個人的には「踏まえて」という意味は、そのとおり別に議論するというのではなくて、いったん全く無視して議論してきたのではなくて、あくまで県教委のたたき台ということの説明だったものですから、いったんそれをベースに理解した上で、当然その 180 度違う

こともあっていいでしょうし、それとは関係ない我々の議論、結果は別として結果になってもいいという、前提の中で進めてきたという意味で、いい意味での踏まえということです。

（鈴木委員）

そういうことが、この委員会でこれなりの。

（中條委員長）

ただ今の補足的な説明が、文章で理解出来なければ行間まで見た方々が読み取れなければ、より読み取っていただけるような、もちろん我々の思いが伝わるような、日本語にしたほうがもちろんいいと思いますので、そういう意味で今の鈴木委員のご発言を踏まえたときに、どういう文言がいいかということを考えたいと思います。

ご意見ご発言ありますか、今の気持ちを踏まえてこのままでも十分読み取れるとなれば別ですし、やっぱりそういう思いは違う文言でもいいのですが、そんな思いを表現するためには、こういう文章が面倒ではないかということであればご意見をお願いします。

（宮川委員）

方向的には私はこれで良いと思います。「それにはとらわれず」と書いてあるんです。というのは踏まえるというのは考えるということですから、別に「ながら」をまでいれなくてもいいと思います。

（鈴木委員）

私が言ったのは、「その内容や背景を十分理解する中で」を削除して、「ながらも」ということを言ったのです。今委員長の発言があったので、特にこだわりませんが。

（中條委員長）

では鈴木委員の発言は、「踏まえながらも」として、その内容以下中でまでをカットする。仮に削除する。

（鈴木委員）

でもこだわりません。

（中條委員長）

一応こだわらしましょう。一字一句こだわらないと納得いくものはできませんから。文言にこだわっていいと思います。いかがですか。それを踏まえたときに、どうですか。

（宮川委員）

私は「その内容や背景を十分理解する中で」というのは、入れた方がいいと思います。

(中條委員長)

ほかにご意見、それでは元通りでよろしいですか。

いいですか、どちらかというとそういう感じですかね。はい。じゃあ次にいいですかね。

それでは、元通りに直します。「県教委からの再編案提示を踏まえ、その内容や背景を十分理解する中で、それにとらわれず」、特に句読点の中でも読点について、中学校以来いつも私先生に直されていまして、ぜひ国語専門の先生いらっしゃいますか。よく見ていただかないと、いけないと。よろしいでしょうか。この1番でほかにございますか。よろしいですか。

(百瀬副委員長)

内容的には私はこれで結構だと思いますが、文言のところで2、3お願いします。

ひとつ気になるのは10行目ですか、「出身母体」とありますが、有識者の方は出身母体というのは特にないわけですね、その辺配慮した文言にしたほうがいいかなという気がするものがそれが1点。

それからタイトルのところから始まって、「最終報告」という言葉が14行目にもございますが、我々今まで中間報告ということは、していないわけです。この報告が最初で最後という形ですので、「最終」という言葉が必要なのかどうかというところ。

それからもう1点ですが、17行目になりますが最後に、「事務局である県教委として」という文言ですが、この事務局である県教委というのは、この本委員会の事務局である県教委という意味で使われているのですか。

(中條委員長)

計画の具体的な実施計画の策定という意味です。

(百瀬副委員長)

そうすると、それは「事務局である」ということではなくて県教育委員会として策定をするわけですので、この事務局であるというのは、削除したほうがいいのではないかと思います。その3点です。

(中條委員長)

ありがとうございました。ということで、推進委員会の事務局たる県教委に、意見を確めたほうがいい面もありますかね。出身母体は、確かに百瀬委員おっしゃるとおりの部分がありますので、出身母体それから中間報告を出して、最終という意味は、中間があつての最終とも取れなくもないので、そういう意味で14行目最初のところで、最終報告としてあるわけですが、これについてほかの推進委員会との整合性もあろうかと思しますので、我々がここで意見交換する前に、まとめにあたって県教委で、考え方なりを示していただければそれでいきたいと思います、それについて何かご意見ございましたら、お願いします。



(吉江高校教育課長)

まず1点目の最終報告といいますが、報告書の表現でございますが、確かに百瀬委員さんがおっしゃられましたように、それぞれのほかの委員会も含めて、中間報告みたいな形でいただいていない経過がございます。それを考えた場合には、例えばの話が第四推進委員会の、「高校改革プランの報告」という言葉がいいのか、あるいは「高校改革プラン第四推進委員会報告」という形がいいのか、そういったイメージは持つ次第でございます。

それともう1点目ですが、「出身母体」という表現につきましては、ほかの推進委員会も含めて、またこの第四推進委員会は本当にここにございますように、どちらかといいますとそれぞれのご出身の地域、ご出身の地域にかかわる議論を、いただいたという経過がございます。それを考えますと出身母体という表現がいいのか、あるいは場合によれば「出身地域」、「出身地」そういう表現のほうがいいのかと、感じている次第です。

(百瀬副委員長)

ありがとうございます。その辺のことににつきましてここで議論というようなことでは、ちょっと時間もありませんから、いずれにしても文言の調整ということについては、それこそ専門家であります、事務局の皆さんからご指摘いただく中で、私どもの委員会へ提起していただくと、次回といいますが、そんなことでよろしいんじゃないかと思しますので、ここできっちりと「こういう文言に」とか、そういうことを決める必要は私はないと、思っていますので付け加えさせていただきます。

(中條委員長)

ほかの言い方で何かご意見ございますか、よろしいですか。それでは、「出身母体」のところはいったん「それぞれの所属・出身地域」と直しておきます。ただこれは今もうひとつありましたように、他地区と合わせるということもあり、次回までに最終報告という文言も含めて、表題との兼ね合いもありますから、申し訳ありませんが県教委で決めたいただければ、もしくはこういうふうにしてほしいということで、ご意見をいただければそれに沿って記載したいと思います。

1のところはよろしいですか。

(百瀬副委員長)

「事務局である県教委…」の部分はどうなりますか。

(中條委員長)

ここもいったんここでは外しておきます。17行目最後の「事務局である」という部分は、ここは一応削除しておきます。

それでは続いて2に入ります。全部読み上げると長いので、まず1)だけ読みます。

2、方向づけにあたっての当推進委員会の基本スタンス(=委員会としてのコンセンサス)  
1)小規模校化を極力回避する。少人数学級論議は、学習集団としての質の論議であって学級規模や学年/もしくは学校の規模の論議とは異なる。すなわち少人数学級にしても学年規模が変わるわけではなく、その小規模化の弊害こそが問題であって、少人数学級はその

解決策にならないこと。また少人数学級は、学級集団＝学習集団である小学校では有効であるが、学級集団 学習集団となる中学校児童では、学習集団としての小規模化は、構成や専門科目等学習面では、すでに導入や今後も有効性研修での導入を進めていっても、学級集団としてのそれに少人数化の弊害が、多く予想されることから小学校の進め方とは異なる。「小学校は＝であり学習集団のメリットを、学級集団のデメリットに優先させている」がその理由である。

従って我々推進委員会は、論議の中では高校生という多感な時代に「お山の大将」でなく、切磋琢磨の機会や生徒会、クラブ活動、学校行事等、さまざまな機会提供のためには、ある一定の規模が必要であり、それも次代を担う子どもたちへの魅力づけであると認識し、できる限り小規模校化の弊害を回避し、一定規模確保していくためには、将来において小規模校化が、懸念される高校を統合していくことも、必要であると結論づけを行った。が1)です。

文章が長くて申し訳ないですが、この中で文章のつながりが長すぎるという気がしますので、その辺でいい文章のアイデアをよろしく願いいたします。それからここはどちらかという先生方のほうが、むしろ専門家なので、第何回か全部つっこんで来たのですが、少人数学級論議があったところでいただいたご意見を、そのまま報告に入れさせていただきました。

個人的に思いますのは、特に高教組の広報というのでしょうか、新聞に掲載されていた、最初のころだったと思いますし、少人数学級を導入することによって、学校数が維持されるのではないかという意見が、多分今でもあるかと思います。そういう中でそうではなくて、例えば我々委員会の中で出た意見としては、例えば20人学級をつくって学年120人で6学級にする。もしくは40人学級で例えば3学級にする。それそのものは、学年数120人は変わらないわけですから、そういう意味で6学級にするから、じゃあ3学年18学級になって、その学校は維持されるということにはならないだろう。ということの議論をしてきました。

少人数学級そのものは、ここに書いてあるように、そのときのご意見は学習集団としてメリットがある。高校でもコース制で少数学習といったことも取り入れたり、高校も必要性があれば、効果が検証されれば当然入れていくと。それと切磋琢磨といった学校行事などが、実施出来るような学年、もしくは学校規模というのは、ここに書いてある内容で見れば、学級集団、学習集団と別の議論ではなく、要は質の論議がなく、世論の論議と意味が違うかもしれませんが、議論の論議と分けて考えるべきだというのが、第何回かで、我々推進委員会を出していただいた意見、それを踏まえてある程度少人数学級論議というのは、我々委員会の中では、そこには戻らずに議論が進めてくれた、と記憶しています。

ただ具体的には蘇南のときだったと思いますが、そうした学級数の少ないところについては、例えば学科、キャリア選択の幅という意味での、コース制を増やしていく必要がある、そういう中でもコース制は地域、むしろ学校長の裁量で出来るという話もあったわけですが、ただそれだと先生の確保を含めた、財源的なばらつきがある。これについては少人数学級というのは、全県的性質ということ譲らない事務局と、では我々はどうするかという中で、少人数学級というのは、そういう地域校もしくは小規模校に限っては、きちっとした財源的、学校もしくは市町村に委ねるのではなく、ある程度県としての裏づけを

持って、導入していく必要があるのではないかということで、その部分の少人数学級と先述の少人数学級は、少し議論が異なるというか、違う意味合いですのでそこはご理解いただきたいと思います。それはまた別のところに記入してあります。

（小口委員）

ある意味ではこの1)の、一番大きな議論かと思しますので、ここは慎重に考えなくてはいけないという意味で申し上げますが、31行目から上に持ってきて、少人数学級論議はそれを補足するという論議だと、私は理解しておりますので、31行目「従って」を取って上に持ってくるというと思います。まず1点目です。ここを私自身は強調したい感がして、例えばそれも次代を担う子どもたちという表現ではなく、33行目「それが次代を担う子どもたちへの大きな魅力づけのひとつであると認識し」ぐらいのほうが、いいのかなという気がしました。

それと細かいことですが、23行目で学年規模ではなくて、学校規模かなと小規模校という感覚からすると、結果的にたいがい規模が少なくなると小さくなってしまいうのですが、細かいことも含めてです。

（中條委員長）

今のご意見で、「最初に従って」という31行から6行下、私が最初に書かなかったのですが、今小口委員が言われたような意味合いもあって、もう少し少人数学級というのですか、その説明があったほうがいいかなということで、結果、頭の何回かの議事録の中からそのままコピーして、ここは貼りつけました。

それから学年規模、学校規模はたまたま最初からその資料が、例えば8学級4学級とか学級が、すべて学年ペースで資料提示がされていたものですから、そういう意味で5.5学級もしくは6学級、これはあくまで1学年での学級規模。従って学校で見れば18学級ということになるのですが、そう意味でそれに合わせるのには、「学年」のほうがいいと思い学年にしてあります。

いかかでしょうか。今のご意見について。確認しますと31行目からの「従って我々推進委員会は」からの6行を、頭の「従って」を取って、これを冒頭に持っていく。これの補足説明という意味での、少人数学級論議の云々という1)の最初の行ですね。ここから9行の段落を下へ持って行くと、段落の順番を入れ替えるということと、強調という意味で33行目の「それも次代を担う子どもたちへの魅力づけである」というのを、「それが次代を担う子どもたちへの大きな魅力づけであると認識し」ということで、「も」を「が」に変えて「大きな」という文言を入れてというのが委員のご意見です。

（鈴木委員）

訂正してばかりですが、22行目の終わりにある、「学級規模」というのは今委員長のお話によると、学級数を表していることですか。

（中條委員長）

ここは1学級何人という意味での、学級規模ですね。

(鈴木委員)

そうなるとこれはいらないのではないかと思います、いかがです。「小規模学級論議」は。

(中條委員長)

学年から始めればいいですね。

(鈴木委員)

そうではないかと思います。それと先ほどの小口委員と私の意見は似ている部分があるということで、発言させていただきたいのですが、全体の部分については、ある面、非常に論議になるのではないかと思います、私自身反論してこなかった部分があって、もちろん先ほど委員長が言われたように、議論を蒸し返すというつもりは毛頭ないのですが、この前段の部分は、必ずしも一致して議論されたことでは、ないのではないかと考えています。

例えば中学校では、学級集団と学習集団は異なるということについては、私の記憶では丸山委員が言われたかにと思いますが、実態とすればほとんどが学級規模で授業が行われていて、特定の習熟度などを導入している、特定の科目、教科だけが学習集団が学級集団を下回る、規模ではないかと思うのです。高校においても国語や数学や英語などを除いては、ほとんど学級集団が、学習集団になっているのが実態ですから、すべてがイコールではないことではないかなと思います。

それと2点目としては、小規模化の弊害こそが問題だということですが、これも議論は避けてきたのですが、小規模化が何か大きな問題だと、いう受け止め方をされるのではないかと、検討委員会最終報告にも、家庭的、家族的な雰囲気が要請されるという点のメリットも、挙げているわけで我々の委員会として、小規模化は弊害があるということを、列記しているのはいかがかなと思うんですね。

例えば先ほど地域高校については、委員長さんも触れられていましたし、次のページにも丁寧に書かれていますので、そのことについてはよく理解しているつもりですが、例えば定時制や地域高校などでは、小規模であるが故に学習についていけるというような生徒を、抱えて指導しているという実態があって、小規模であるからこそできる教育というものがあると思うのです。従って弊害というように一刀両断で切ってしまうのはいかがかなというのが2点です。

もう1点ですが、これも議論の中にも出てきましたし、最終報告の中にも書かれていますのですが、「切磋琢磨」ということですね、確かに一定規模があれば競争があるということでお互いが、磨かれるということはあるのですが、この切磋琢磨も、もう一方では問題点もあって、過度な競争がさまざまな教育問題を生み出しているという、そういう問題もあると思うのです。従って、議論の分かれるところについては、私は入れない方がいいのではないかと思います、3点について意見を言わせていただいたのですが、かといって代案がなければということで、私は最初に言えば、国語力がなくて文章としてはよくないですが、このように書いてちょっと読ませていただいてもいいですか。

「小規模学級論議は、学習集団としての質の論議であって学年、学校の規模の論議とは異なる、これは前段と同じです。今後予想される学年学校の小規模校を、検討委員会の最

終報告の趣旨に沿って、打開することを第1義として議論した結果、当委員会では生徒会、クラブ活動、学校行事の運営などに支障がなく行われるためには、一定の学年学校の規模が必要であるとの決議に至った。従って将来において、小規模校化が懸念される旧学区において、高校統合をしていく必要があるとの結論づけをおこなった。」というようなものを私が考えたのですが。

（丸山委員）

今のことと関連して、特に25行目から31行目までの件であります。私は小学校では、学級集団と学習集団は同一が望ましいと、中学校以降については必ずしも同一でもなくともいいという思いがありました。今鈴木委員さんが言いました、特に28行目ですか、「少人数化むしろ弊害が予想される」というあたりは、必ずしもその辺を検証されたわけではありませんし、ここはまだ効果等についても、十分検証されていない面もあるかと思うので、結論から申し上げますと25から30行目までは、削除してもよいのではないかと考えております。そうしたら「お山の大将」という表現も、若干問題があると思いますので削除がよいかなと思います。

（中條委員長）

これは1、0ではなくて、私の書き方に問題があるかもしれませんが、当然少人数学級のいい面を否定しているのではなくて、ただ学級＝学習としての集団で行われているときには、それは例えば少人数学級のメリットよりも、学級のある程度の規模を優先するというのが、小、中、高あまり中ではなくて、小学校と高校を比較した場合には、小学校では学習集団としてのメリットを優先させてからで、仮にデメリットがあっても少人数学級は効果がある。逆に高校になると、むしろ逆のほうに効果を優先させていくという方向づけなり、意見だったと思いますので、それは書き方。ややもすれば少人数学級さえ導入すれば、高校というのは再編する必要がないんだと、我々のようにいろんな説明をいただき、それから丸山委員などのご説明を聞きながら、例えばどういうふうに議論をしたかという理解を向けて、ややもすると少人数学級で120人の学年も6学級になれば、高校も維持できるんじゃないかという理解につながっていかないか、ということが一番気にかかっています。

そうではなくて、そういう学校も当然すべてを数の論理、もしくは数の論理でふるつものは全くありませんが、もし統合することによって、統合するメリットのほうが現状の小さな集団の効果よりも、優先できるのであれば、これはあくまでも子どもたちにとってですが、優先できるのであればそういったことも、選んでもいいのではないかということ、きちっと伝えるべき。前回でしたか、前々回の議論の中で、私は今でも専門校2つが一緒になっても、いいのではないかなという思いはあるのですが、そこはコンパクトな規模で資格取得を含めて、コンパクトな規模でやっていったほうが、実習だとか一般のほうから専門校というのは、無理だというご意見が多数でしたから、そういうことも当然あっていいと思います。

逆に読む方は、我々のそういう議論が抜けて、これを我々の報告として読むわけですから、当然文章などで今いったような思いが、行間を含めて伝わらないといけなないので、伝えるために先ほど鈴木委員が読んでいただいた文も比較に含め、こういった使い方がいい

かぜひ確認していただきたいと思います。今の件でほかにご意見があればお願いします。

（百瀬副委員長）

今の少人数学級論議の云々のところでありますが、特に 25 行から 30 のところについては、丸山委員さんのおっしゃったように、ここを書くとするとかかなり難しい部分だと思います。私も読ませていただいているのですが、なかなか理解しにくい文章という失礼ですが、そういう部分もあると思うんです。それで委員長さんの思いというのも、分かりますが、報告書として書くとなりますと、行間の思いというものは、なかなか見ていただけない部分もありますし、そう意味では具体的に書いたほうがいいということになりますが、その辺は今、丸山委員さんが言われたような形で、本委員会として、こういう形で議論の収束をみた、というようなことでも無いような気が私はするのです。ですのでその上の、書き出しの部分の 2、3 行位の形で、サラッと書いた方がむしろいいのかなという気がしております。

いずれにしても、我々この委員会としての、こういった教育の本質にかかわる部分というのは、どのように表現すればいいのかというのは、非常にそれだけの能力を、私自身も持ち合わせていないように思います。

この辺のところは、事務局の指導主事の先生方のお知恵をいただいて、そして教育論として評価しうる、そういう表記が、非常に大事な部分ではないかというようなことで、ぜひその辺を事務局の先生方に、またご指導いただきながら、最終的な成文にしていかなるを得ないと、失礼ですがそういう部分もあるのではないかと思います。

今ずっとこれをやっていると、何ページもありますので、あと何回もやらないと、まとまらないということになりますが、いかがでしょうか。

（中條委員長）

ほかの委員さんご意見ございますか。いかがでしょうか。

別に教育論をぶつつもりはありませんので、あとで我々が議論してきたことを、ここに明記しました。

順番後先になりますが、我々としての基本スタンスは、片カッコで 8 つ入れてあります。ちょっと確認いただきたいのですが。

ひとつが小規模校化を、極力回避していくということ。2 番目は学級数を柔軟に対応するという。3 番目として、所謂「地域校」の存在に認識するという。4 番目は子どもたちの多様化を踏まえ、入学後の選択肢を拡充するという。5 番目として、全校に対し各校のポジショニングを踏まえた、個性ある魅力作りを求める。6 番目が、山間部を中心に地域一帯としての連携強化を求める。7 番目が市町村や経済団体等との連携を進め、地域ニーズに応える。8 番目、最後は経費削減を目的としない。という中でその他のひとつが、小規模校化を極力回避すると、いう議論いただいているところでございます。

こうした 8 つがふさわしいかどうかは、これから議論いただくのですが、こうしたスタンスをベースに、我々はどういう体制が望ましいのかという争論から、確論への検討を行ったという意味での、ある意味我々と十何回の総合的にはベースになるということになります。ほかにご意見があれば、お聞きしたいのですがいかがでしょうか。

ではいったんは31行からの小口委員から意見のありました「我々」からの部分だけにしておきます。それから後で、鈴木委員の文章をいただいて、次回は両方併記した上で見ていただく。ただ違ったことが書かれていれば、直さなければいけませんが、基本的に県教委がこれをつくるわけではないので、我々が議論して間違ったことがなければ、我々の言葉で、我々の内容をここに表記していけば、私はいいのではないかと思います。ただうそを書いてはいけませんし、理論としてもし固まっていくのであれば、もしくはまだまだ固まっていないものがあれば、それは訂正するもしくは還付すると、いうことは必要だと思います。

ではいったん百瀬委員からありましたように、ここだけ時間をかけても勿体ないです。で、いったん31行目からの「我々」から。当初この部分しか実は書いてなかったのですが、この部分だけにいったんします。それで「お山の大将」云々のいい表現があればですが、ちょっと議論の中で一番頭に残すのが、このような用件ですが、それから鈴木委員から、今日終わってからいただいたのを並べて、次回事前に送付しませんので、次回お配りするものにはそれは両方明記をして、最終を決めたいと思います。ということによろしいでしょうか。

それでは2)を見ていきます。2ページの頭ですね。学級数は柔軟に対応する。県教委の再編案のベースとなった、少数決定基準を前提とすれば、現状でのすでにそれを下回る意味では(旧通学区)ある中で、学級数については今後増加が見込まれるエリア(旧通学区)や年度もあることから、特にこれまでも、中学浪人比率の高い旧第11通学区を含む、第4通学区としては、いたずらに中学浪人を生むことのないように、学級数は今後も生徒数や進学ニーズとの必要に応じ、柔軟に対応していくことを求める。以上です。

分かりづらいかもかもしれませんが、2行目の総数決定基準を前提にすればという点で、そのあとに、学校数は現状でもすぐそれを下回るエリアとするの、「学校数」という言葉を入れてください。ご意見ありますか。

(小口委員)

今の学校数は下回るというところは、旧通学区ではなくて旧第11通学区と入れたほうが非常にわかりやすくなるのではないのですか。

(中條委員長)

よろしいでしょうか。「学校数は」というのを入れさせていただきます。

3)に入ります。所謂「地域校」存在を認識する。県教委の再編案同様、子どもたちの通学エリアを踏まえ、廃止してしまえば通える高校がなくなること避け、そうした高校については、例え小規模校化が懸念されても、今後とも存在させることが必要である。また将来的にもそうした「地域校」維持等の存続のために、小規模校に限定しての少人数学級や、財政的裏付けある少人数コース制の導入について、小規模校に通う子どもたちへの進路選択肢の、拡充を前提に県教委として前向きに検討するよう要望する。

以前お送りしたものとの変更点だけ先に確認しておきます。10行目ですね、「通える高校が無くなることは避け」というところを、「無くなることを避け」、その次ですが、そうした高校については「たとえ」を入れました。それから小規模校、高校の「高」を入れて

ありましたが、これも県教委事務局から、学校の校舎の「校」ですね、こちらに変えた方がいいということのご指摘がありましたので、小規模校の、「校」の字の漢字を変えてあります。そこでの修正は以上です。

（今井委員）

この報告書は、第4通学区に關しての報告書になりますので、この今地域校というところを明言していないですが、ここは具体的に校名を挙げて、ここが地域校という認識をしているということは、出してもらったほうがいいと思います。そうすると白馬と蘇南この2校になるかと思うのですが、そこはいかがでしょうか。

（中條委員長）

今のご意見いかがでしょうか。

（小口委員）

賛成です。わかりにくかったです。

（宮川委員）

「所謂」という言葉はどうかなと思います。

（中條委員長）

これはこれに合わせて確認したわけではないのですが、第何回かに地域校という言葉を使ったときに、県の教育委員会としては、正式にこの地域校という名称はない。ただ地域校連絡会と言いましたか、そういうもの組織があるのでその意味での「所謂」という意味合いです。

そうすると11行目将来的にもそうした「地域校」という部分に校名を、入れるということに關して、反対必要ないのでは無いかというご意見があれば、「いわゆる地域校」と位置づけは。将来第4通学区を見たときに。

（吉江高校教育課長）

こちらの委員会において、いわゆる「地域高校」という言い方ですが、私どもの言い方からいきますと、いわゆる「地域高校」という言い回しを使いますと蘇南高校、それから梓川高校、それから池田工業高校、白馬高校というような4つが入るかと思います。そこに場合によりますと、木曽山林と木曽高校が任意の加入ということで、プラスされた議論である場合と、まったく外れていく場合とがありますので、そういう意味では若干難しい面があります。

（中條委員長）

今事務局がおっしゃられたのは、地域高校の集まりという中に、高校が反対に通信委員会でいうと我々が想定した蘇南、白馬以外に梓川、池工。それから状況によっては木曽、木曽山林の両方が入るケースがある。



それから名称は、使ってらっしゃるという言い方もおかしいのですが、「地域校」ではなくて「地域高校」ですか。

（吉江高校教育課長）

この言葉は、使うことがあまり好ましくないという議論はあるのですが、現状においてはいわゆる「地域高校」ということで、使っているのが事実でございます。

（中條委員長）

そんなに入れると、我々のニュアンスが違っちゃいますよね。そうするとあえて「地域高校」と呼ばずに、「地域校」として我々の議論の中で、認識した地域校については蘇南、それから白馬が我々としては、合致したということにしたほうがよろしいですか。

また、6 学級。遠い将来的にはもっと数が増える可能性は、リスクがあると思うのですが、我々がここで想定したのは、さっき宮川委員がおっしゃられたように、蘇南、白馬について、その今の 3 学級、2 学級の数字になる。特にもともとの総合選択制というのを、大北にも必要じゃないかというのは、そういう意味合いだと思うのですが、キャリア選択ということで、蘇南は今 3 学科ですが、これを維持していくため、少なくとも拡充をつくしても現状を維持していくためには、結果学級数も例えば 40 人募集でありながら、20 人にならざるを得ないという、そんなリスクに対しての可能な限りの支援策ではあります。

校名を入れるということは、よろしいですか。具体的にイメージ、先ほどの地域高校というと実際は 2 校だけではないというご指摘もありましたので、そういう意味では具体的な名称を入れたほうが、いいということで。では白馬と蘇南を入れるとして。名称は地域高校という我々も想定しなかった言葉でありますので、ある意味ここは「地域校」として、ここは「地域高校」とは違うんだという意味合いで、あえてそういう名称は、実際無いかもかもしれませんが地域校ということにします。白馬、蘇南はどこに入れるかは、ちょっと文章をおさらいの時点で考えますので、ここは白馬、蘇南を入れるということによろしいですか。

入れなくてもいいだろう、将来もっと対象が広がる可能性もあるのだろう、同じ事はその同じ対応というのですか、この場合によってはそういう合意でないと将来必要になるのでこのままでいいじゃないかと思っております。いいですか。はい。ではそうさせていただきます。

では続いて 4) です。子どもたちの多様化を踏まえ、入学後の選択肢を拡充する。今後多分ご批判あるかもしれませんが、嫌な言葉ではあるが「不本意入学」現実として存在する中で、入学時は仮にそうであっても、入学後のキャリア選択による進路は、「進む」直していただいております。選択による進路決定や変更等、子どもたちの多様化に合わせて学科選択が可能となるよう、総合学科高校のさらなる充実と、ミニ総合学科的な総合選択制の充実。さらには県教委としての財政的裏づけを担保してのコース制導入等を、積極的に進めるように求めるという文章です。ご意見ありましたらお願いします。

（百瀬副委員長）

気持はわかりますが、冒険といえますか、そういうようなことの中でも、不本意入学の生徒が何パーセントいるとかいうようなことで使ってはいる。ちょっと私ももう忘れてしまったのですが統計的な資料の中で、そういう大きな項目を確か扱ったアンケート等が、あったような気がしますので、事務局で、教えていただければありがたいのですが。

（中條委員長）

委員会の中の議論は、仮にそういう子たちがいても、卒業する時は自分の学校がもちろん好きになって、かつ、仮に本当にその学科が不本意でこの学科ではなくても、出るときは場合によっては、転科もあって進路選択できちっとしたこういう指導がされたと、選択肢もたくさんあってという意味合いが我々の議論で、ということでもいいですか。

（百瀬副委員長）

大変そういうこともありますし、今最後までなかなかそういう気持ちに、なれない子どもも確かにいたと思います。

（中條委員長）

実態を把握したほうがいいですか。

（百瀬副委員長）

そうですね。

（中條委員長）

そういう調査の資料はありますか。

（柳澤教育主幹）

今、不本意入学というようなことでの調査と、いうわけですが、いわゆる進路変更とかそういった中途退学をする生徒の、要因調査みたいなことですか、あるいは長期欠席いわゆる不登校の、生徒さんたちのその要因の調査と、そういったことでの項目では調査の中に記載したことはございます。

（中條委員長）

「不本意入学」という言葉を、そのものをカットしたほうがよいという、意見はないですね。

（百瀬副委員長）

ですから、私はむしろそういうことがあれば、その言葉は、嫌な言葉であるなんていうのはなくても。

(中條委員長)

では今おっしゃられた部分は削除して。言葉そのものは存在しているのです。調査項目にとらなかったとか。ではそのままよろしいですか。はい。

では「嫌な言葉ではあるが、」までを削除しまして「不本意入学」からそのままにします。それからすみません、漢字変換が間違っていましたので、「針」ではなくて「進む」進路ということで、そこの修正をします。それから次。そこまでよろしいですか。

(鈴木委員)

今まで議論をしている間によく分りますがミニ総合学科の意味です。初めて見る人は、何だろうと思っているのだろうと思うのです。意味はなくても総合学科という意図はあって、「ミニ」は無くてもいいかなと思うのです。というのはそういうふうにすると4ページにある「ミニ総合学科」というのが見えてくるかなと思うのです。

(中條委員長)

そこも、ではよろしいでしょうか。では「ミニ」をとります。総合学科は入れる、でいいですか。はい。わかりました。

それでは5番目です。全校に対し各校のポジショニングをふまえた、個性ある魅力づくりを求める。結果論ではあるが再編案が県教委から示されたことにより、対象となった高校の存続に向けた「魅力づくり」での議論が。すみません「各地」にしてください「域」ではなくて。各地で高まったことは遅ればせながらの感もないわけではないが、結果的には皮肉的にせよ「再編案効果」ではある。これまでの個別魅力づけへの取り組みが、なされてきたことは承知しているが、地域一帯となった取り組みは、今回緒についたところと言っても過言ではない。

今後は対象となった高校のみならず、子どもたちにどういった魅力を提供すべきか。またはできるのか。対象校以外の「我関せず」ではなくすべての高校にこれを契機とした真摯な、またより一層の取り組みを期待する。

(鈴木委員)

26行目になりますが、「といっても過言ではない」というのは、ちょっときつすぎるかなというように思います。「ということもできる」ぐらいにしたほうがいいのではないかと思います。例えば白馬などは、もうすでにもちろん地域を挙げての危機感がありましたが、観光コースやアルプスコースを設けてやっていたり地域の話、あるいは北という話も聞いていますから。ここまで言い切らなくても、出来るのではないかなと思います。

(中條委員長)

他ご意見ございますか。

その高校は地元の子が、何で行かないのかということをよく考えていかないと、本当になくなってしまいます。全国募集、全国募集と大勢来るわけではないので、いかに子どもたちが、やっぱり来るような魅力っていうのを、ぜひ中学と高校と一体となって、進めていかないと。我々が議論して付記したようなリスクが、何年か何十年かわかりませんけ

れど、そうならないようにしていきたいなと思います。

(宮川委員)

「結果論ではあるが」というのは取ったほうがいいと思います。「結果的には皮肉的にせよ」というのは、その文章のところにでできますので、「結果論ではあるが」はなくても、大変がそこから始まって十分言っていることはわかる。

(中條委員長)

今のご意見は、5)の一番頭の「結果論ではあるが」を取る。それから鈴木委員今何とおっしゃいましたか。過言ではない…。

(鈴木委員)

「言うことを」。

(中條委員長)

「言うことを」ですね。

(今井委員)

おそらく委員さん方みんな、何となく理解している言葉だと思うのです。(ポジショニング)という言葉なんです。このポジショニングという言葉は、何となくイメージはできるのですが、結構それじゃあ何と言われると。

(中條委員長)

何かいい言葉ありませんか。

(今井委員)

直訳してもよくわかりませんが、多分立地条件や、創設の時の背景、あるいは「現在の位置づけ」というような意味合いが混ざったような、意味合いになっていると思うのです。ただ、ここを項目としてうたうときには、ある程度その項目を読んだときに、その意味がストレートに伝わるような、表現にしたほうがいいかなと思っていますので。「地域における位置づけ」とか、何とかというようなそういう言葉に。ちょっと位置づけという言葉が、いいかどうかはちょっとわかりませんが、ここはもうちょっとわかりやすい言葉に、変えたほうがいいかなと思うのですが。

(中條委員長)

「特徴」だと違いますか。

(小口委員)

私はもっと強い表現を、5 番は 2 番目にもってきて書くべき内容だと思います。現実には手についたばかりというのは私も思っています。今までこんな議論がされてきたとは、記憶にないのでして、非常にその面では皮肉どころか結果的に、非常によかったと思うわけでありまして。ましてや私達におかれたミッションは、魅力づくりと再編であったわけで、この部分は大きな二つの目標の一個だったわけです。

もっともっと強調して、この地域のみならず全県が継続的に、子どもたちの将来を考えていく土壌をつくっていかなかったら、高校存在の意味そのものが、ないわけであったと思っていますので。今、今井委員さんからのポジショニングを、もし変えるなら高校の存在意義と変えてもまったく問題ないと思っています。

(中條委員長)

他ご意見がございますか。今申したのは、それはポジショニングを例えば「存在意味」のような強烈に変えて、かつ順番をもっと頭にもっていくとそういうことですね。

(宮川委員)

結果的には「皮肉的」という言葉は外したほうが、結果的に再編効果が出たという形のものにしたほうが良いと思います。

(中條委員長)

世間から批判もあるのでは。それに対する嫌みです。

冗談ではなくて、呼ばれて行った木曽のシンポジウムですよね。木曽と山林が関係したものでありましたが、再編案そのものには反対だが、我々はこういう魅力づけという、その検討機会を与えてくれることは素直に感謝します。だからみんな一生懸命考えましょうという概念で考えてきたのですが、まさしくその通りだという意味です。

では表題のところは削除します。今言葉としてはポジショニングもしくは特徴、位置づけ、存在意義と出ましたがいかがでしょうか。はい。いいですか。では「ポジショニング」ではなく「存在意義」に変えます。

ではそこはよろしいですか。確認します。表題は全校に対し各校の存在意義を踏まえた個性ある魅力づくりを進める。「結果論であるが」は取ります。再編案が右から始まります。

その次のところ。「各地域」を「各地」にさせていただいたということと、それからその次の行。24 行になりますが、結果的には、のあと「皮肉的にせよ」を取ります。

それから 26 行「緒についたといっても過言ではない」を「緒についたと言うことも出来る」。これはよろしいですか。

(藤本委員)

例えば大町の市長さんがここにきて大町の現状、大町高校と大町北高に対する地域の援助の実態を公表していただいたということ、自治体が危機感をもってこれからやっという熱意といいますか、そういうことは今までなかったことなのです。そういった内容を文章の中で盛り込んでもらいたいと思います。

私は、これでもいいと思いますが、そのような新しい動きがあったということも、盛り込んでもらえたらありがたいと思います。

（中條委員長）

具体的に文章にどこへどのようにと、その意味合いは。

（今井委員）

今の藤本先生の言われたところは、対象となった高校の存続に向けた魅力づくりでも議論が各地で高まった。とあります。その後ろに、例えば大町市でのこういった動きもありというような表現で、中に入れればと思いますが。

（宮川委員）

そうなるとみんな入れなくてはならなくなりますね。

（今井委員）

このことに関して地域との連携や、例えば地域の盛り上がりとかということが今回あったのですが、実際には高校の教育に関しては、今まで例えば地元の教育委員会と何かとの交流があるとかいうのは、おそらく多分なかったと思うのです。

例えば大町は大町市役所、木曽ではどちらかというとOB会が中心になって動くとかいうことで、今回ここに議論を持ち込まれた段階についても、千差万別な団体が出てきて、そこから出てくるという実態なのです。

私も一昨年度になりますが、経営者協会の中でいろいろ教育問題をこれから、経済団体として、もっと突っ込んでいこうというようなことを、やっていくときに、いろいろ教育委員会とか、先生方においていただいて、いろいろ事情を伺った中で、実際には地元としては地域としては、中学までのところについては、やっぱりかなりいろんな支度ができるという、行政的な仕組みがある。しかし高校については、おそらく県レベルでの施策というところしか多分今ない。その辺はあとで事務局に確認したいのですが、多分私の認識は間違っていないと思うのです。

だからこういったところを、折り込んでいく場合には「地域」という言葉自体が、非常に不明確なのです。どこにそこを求めていく。このままただやっていくと高校だけに、それを求めていくという形になっちゃうのです。「地域に求める」といったときに、求める相手先というところが、今の仕組みのなかでは実際にはない。だからそのところを例えば仕組みづくりを、してくださいよとかいう一行を、入れていただいたほうが、実質的にはいいのかなと、思います。

（中條委員長）

これまでも各高校は、その効果であるとかレベルの強弱は、差はあるのかもしれませんが、学校評議委員ということで経済団体や、地区だったら地区の常会長だったり区長さんだったりとかいう方もいれて、すでに3年位ですか、やってらっしゃる。

その中では、辰野高校が長野県では先駆的な、これは文科省の学校評議委員という制度

ができるもっと前から、機会をもってこられたと聞いています。梓川高校が確かモデル校になって、進めてこられたとかということもあるので。もちろん小、中は今、今井委員がおっしゃられたように、各自治体の教育委員と直につながられますから、そうでなかった高校もある意味、始まっていると理解しています。今のご意見、ご質問も申し上げましたが、県教委から現状について補足あればぜひお願いします。

（篠原教育幹）

今委員長がまとめてくださった通りでございます。ただやはりいわゆる地域高校では学校評議員制度が始まる前から、高校側がその高校へ通う生徒がいるそれぞれの教育委員会。ここにいわゆる学校に対する意見を申し述べていただくそういう場を設けている高校も、現実にございました。

ただ基本的には、やはり県立高校であるということで、県の教育委員会がという形になってきて。いわゆる地元の教育委員会が政策として、学校にものを申し上げるということはこれまでになかった。協力関係はいろんな形でありました。そんなところが現状でございます。

（中條委員長）

それでは先ほどの大町というか地元に対してということで、ちょっと読み上げます。

1 行目の対象となったというところですが、対象となった高校の存続に向けた「魅力づくり」での論議が、地域連絡協議会が設置されるなど、各地で高まったことはということ、では弱いですが。

ではもう1回文章を確認します。5)のところですが、全校に対し各校の存在意義をと標題を変えます。それから最初の行。「結果論ではある」、を取ります。それから次の行は魅力づくりでの議論が、地域教育連絡協議会が設置されるなど各地で高まった。その次の行。結果的には、のあと「皮肉的にせよ」、は取ります。この再編案効果では。

それからその次の行です。これまでのところの次の行ですが、今回緒についたところということもできると。以上が5)のところ。多少焦ってききましたが、時間が一応11時40分になってしまうのでここでいったん休憩をはさみます。では10分ということで今40分になるところですので、50分までには席にお戻りいただくようにお願いします。休憩をとります。

それからちょっと用紙を回覧しますので、終わるまでにチェックをお願いいたします。

【休憩後再開】

（中條委員長）

それでは、再開いたします。

では2ページの最後6番。6)です。山間部を中心に地域一帯としての連携強化を求める。少子化、過疎化がより深刻である山間部をかかえる長野県にあって、とりわけ第4通学区は、北の白馬高校から南の蘇南高校まで南北に非常に長く、ここは地域高校に一旦してありますがいわゆる「地域高校」を抱えている。委員会論議の中で、地域連携の取り組

みのアイデアなどが、県教委の確認を待たずとも町村の教育委員会との、連携の中で可能なものも散見されており、従って「オラが町の、村の」高校として地域一帯となって取り組んでいると、その積極的・具体的実行に期待するものである。以上です。

なにかご意見ありますか。

ここは「地域高校」でいいですか。具体的にはあとで確か書いてあったと思いますが、例えば専科の教員の兼任でご意見の中には、両方兼任だとかえって交互にとは言いませんが、子どもたちの結びつきが薄くなってしまうという、弊害もあるというご意見もあったのですが、もし例えば音楽などの専門科目で、実は先生がいらっしゃらなくて、その科目が嫌いになってしまうということがないように、もし市町村との連携の中で、中、高になります。兼任が可能であればそんなことが、県教委の確認をとらなくても市町村教育委員会が、確認すればやっていけますよというような意味が、この中には書いてあります。

それとさっきもありましたが、学校評議委員制度は始まってはいるのですが、例えば白馬にせよ、中高連携の取り組みがまた始まったとか、そういう話があるので、そういう意味でより課題が多いところは、ぜひ学校に任せるのではなくて、ぜひ地域連帯の取り組みが、これを契機により進めていただきたいなと思います。

地域高校のことは申しましょうか。さっきは蘇南、白馬にむしろ校名は入れるにしても地域高校という一般に使われている、それとは違うという意味で、地域校に逆にしたのですが、ここは2校に限定する必要がないので、世間一般に言ういわゆる地域高校ということではよろしいでしょうか。はい。ではここは変更無しでいきます。

続いて3ページ。ここは少し似てはいるのですが、7)市町村や経済団体等との連携を進め地域ニーズに応える。この「高校改革」盛り上がった各会からの意見提起を、決定後に萎縮させてしまわぬよう、とかく閉鎖的との批判を浴びかねない「教育界」門戸を開き「オラが高校」意識を高めるべく、取り組みを継続していくことを期待する。

これはすみません、回数は忘れましたが経協から経済団体との連携や、また他にもそうした連絡協議会等、いろんな団体からの提議も寄せられていますので、それをぜひ報告が終わったから終わりではなくて、高校が残ったからそれでいいやではなくて、ぜひこのまま続けていきたいなと思います。

(小口委員)

「決定後の萎縮」という表現かどうかちょっと疑問が残るのと、その前後に「先送り」をぜひ入れてもらいたいと思います。

(中條委員長)

先送りをせずに、という表現でしょうか。

(小口委員)

「せずに」ですね。



(中條委員長)

国語の専門の先生はいらっしゃいますか。一応今のご指摘ごもっともで、一般に使われている「萎縮」だと、意味合いが違うのかなと思って、ちょっと調べたら小さくなってしまふという意味もあったので、そういう意味で、他にもっとふさわしい単語があれば、変えたいのですが。

終わったら、「ああよかった」で、終わっちゃわないかなという心配です。

(今井委員)

決定後にもその活動が、継続拡大できるよう表現。

(中條委員長)

ではその1行の最後のところですが、最初に先送りをせずということで、その他今、今井委員からいただいた内容の言葉に何か入れておきますので。むしろ前向きに継続拡大できるようにというような感じにしておきます。

それでは他よろしいですか。

(神澤委員)

言葉の部分ではなく、その前に6番に関わってしまうのですが、ちょっと私わからないので質問しなかった。これを検討した後の受け皿として、この推進委員会の前に行った改革プラン検討委員会で、地域教育プラットフォーム構築という話は、出ていたわけですが、このあたりの考え方はどうなるのか。というのはせっかく南安もそうで経営者協会としてのいろいろ経済界の立場として、なにも地域高校あるいはその場所に限らず、先ほどの5番ですか、という話があったように、一部の地域高校云々って言って再編に関わる地域の人たちは、非常に熱心に始められている。ところが、それに関わらない地域の人たちはまだまだという状況ということもあって、継続をやはり考えていってくださいと、言うのは結構なのですが、それを受ける受け皿としての、組織体として私どもとして、何か今後そういう体制、例えば改革プラン検討委員会で、若干テーマになったような、地域教育プラットフォームみたいな創生を、ぜひともお願いして継続していただきたいとか。その辺までを記載しなくていいのだろうか。

実はここで全部見たのですが、そこに組織体等、地域教育プラットフォームみたいな創生をして、継続していってくださいよという論述される部分がちょっとかけていたので、確かに地域教育プラットフォームそのものを、検討したという記述が無かったのでやむを得ないのかなとも思うのですが、その辺をどこかで汲んでいただければなと思います。

(中條委員長)

ほかには、多分教育界からの投げかけというのは難しいと思います。むしろ逆に受け皿が、ぜひこういう事をやるので一緒にやりましょう、みたいな投げかけがないと難しいと考えていくと、我々としてそこまで踏み込んでいいのかということが1点。

従って、松工と南農のところには、ものづくりとの連携や、例えばバイオテクノロジーだ、大規模農業法人等、逆に個別のものを入れましたが、経協など具体的な名称を使うの

は無理かと思って、そこは外しました。

ただ、地域教育プラットフォームは、別に経協に影響されたものではないし、それが確かに我々1回それを議論していますし。あのときも、それができれば魅力ができるというより、やっぱり学校側と個別の魅力があった上で、その人材のネットワークという意味での地域教育プラットフォームですか。それと無理にこれを置けば、議論と言うか意見が多かったと記憶しています。ちょっと入れておきますか。

実際小、中でも、総合学習の中で地域のお年寄りとの交流、例えば医療機器や、民芸的なものを実際につくってみるとか。高校の中でもOB中心にいろんな各界のOBを招いて、キャリアセンターと言っている意見も多いという感じも強いと思うのですが。そんなことをやっていくという意味では、どういう名称をつけるかは別にして、管理も堀の中といえますか、学校のその敷地の中だけに限られない、外との交流というんですか。活用のいろんな所で始まっているっていうのは、新聞等でも報道されていますので、地域プラットフォーム的な投げかけを入れておきます。ほかによろしいですか。

はい。それでは次に最後の8)になります。ここもちょっといろいろ意見あるかもしれませんが、経費削減を目的としない。統合による経費削減は結果であって目的ではない。仮に経費削減を目的とするのであれば、教育費支出の大半(8~9割)を占める教員削減が必要であり、高校統合そのものによる効果は必ずしも大きくはない。生徒数が減少している以上、当然のことながら無尽蔵に、教育投資をしていいというわけではないが、身の丈に合った投資として、かつ投資対効果を検証しつつも、次代を担う子どもたちへの必要な教育投資は決して削られるべきではない。

ご意見ございましたら。よろしいでしょうか。8、9割っていうのは違うって言うたらいいのでしょうか。

(吉江高校教育課長)

概ねと入れていただければいいです。

(中條委員長)

よろしいですか。それでは次に入ります。3、再編案、最初の。

(百瀬副委員長)

先ほども少し、どなたから出ていましたが、この項目の順番でいいかどうかということについては、どうでしょうか。

(中條委員長)

最初にちょっと触れたつもりだったんですが、もし項目に何か。

(百瀬副委員長)

よろしいですか。確かに魅力ある高校づくりに関する事項というのが、この委員会に対しての審議事項の最初にございました。そういう意味では5)番ですか、この「魅力づくり」というこの部分を最初に持ってきて、そして後、私の考えではその次へ1)番ですか。

「小規模校化を回避する」というものを持ってきて。3) 番の「地域校の存続意義を認識する」というのを3つ目に持ってきて、それから4番目には「子どもたちの多様化を踏まえ云々」と。そして5番目に2)の「学級数、柔軟に対応」と。そして6番目に7の先ほどの「市町村や経済団体等との連携云々」というこれを6つ目に持ってきて。そして7つ目に同じ連携というような形で、「山間部を中心とした地域一体の連携」というのを7番目、そして「経費削減」というのは1番最後の8と。こんなスタイルはどうかなと思ったのですが。

(中條委員長)

先ほども、5)については、あとに持っていったほうがいいだろうというご意見がありました。今、百瀬委員から全体の順番、事項も触れて構成についてのご意見ございましたが、ほかにご意見ございますか。

(丸山委員)

私も、百瀬委員さんと同じような考えであります。もう一度振り返って見たときにこの委員会は、「魅力ある高校づくり」と「再編」のこの2つの大きな柱で議論してきましたので、そういう面でこの原案を見返してみますと、1番最初の「始めに」で、例えば10行目になりますか。「出身母体に拘らず」、その後で、例えば「魅力ある高校づくりと県立高校再編整備についてできる限り客観的な」と、そんな言葉をやはり最初のところへ入れておかないといけないかなと、その後へ今百瀬委員さんおっしゃられたような、魅力あるというところを2番の中へ、項立てとして入れていくことが、大事なかなと感じました。

(中條委員長)

まず、もう1回1ページ目の10行の「拘らず」の後に。

(丸山委員)

「魅力ある高校づくり」と、「県立高等学校再編整備について」、あと以下できる限りです。

(中條委員長)

一応、県教委で、推進委員会のところで毎回同じ内容で各1から4のある推進委員会入れているのですが。その言葉とは合っていますか。

ひとつは魅力づくり。それから3つありました。多部制・単位制。そこと合わせます。文章として。いずれにしても、「拘らず」の後に目的を、我々の本当の目的を入れたらどうかというご意見ですが、それについてはよろしいですか。はい。そこに入れるようにします。

それから、この1から8までの順番ですが、これまでのご意見を踏まえて、ほかにご意見あれば。ちょっと確認していきますか。まず、1番はここで言う5番の、全校に対し各校の存在意義に踏まえたという、これを1というご意見です。これはよろしいですか。では5)を1に持ってきます。それから2番目をどれでしょうか。

( 百瀬副委員長 )

2 番目が 1)。

( 中條委員長 )

2 番目が 1) 今の小規模校化をという、これをそのまま順番下げたの 2 番目。これもよろしいですか。3 番目は。

( 百瀬副委員長 )

同じです。3 番です。

( 中條委員長 )

いわゆる地域校の存在を認識する。これはそのままです。はい。4 番は。

( 百瀬副委員長 )

4 はそのまま。

( 中條委員長 )

4 もそのまま。はい。5 番は。

( 百瀬副委員長 )

2) を 5 番。

( 中條委員長 )

2) 学級数は柔軟に対応する。これが 5 番。6 番は。

( 百瀬副委員長 )

1 番の次 3 ページの 7)。

( 中條委員長 )

市町村や云々という、これが 6。それから山間部これが 7。

( 百瀬副委員長 )

それが 7) です。

( 中條委員長 )

今の 6) を 7) として、8) はそのままですね。以上もう 1 回確認をします。

1) 片括弧の順番ですが、まず 1 番は前章 5 番の全校に対し、各校の存在意義を踏まえた個性ある魅力づくりを求める。それから 2 番目が、今の 1) を 2 番目にもってきて、2) として小規模校化を極力回避する。3 番目が今の番号のままですが、所謂「地域校」の存在を認識する。

それから 4) がその下、4 番のままですが、子どもたちの多様化をふまえ入学後の選択肢を拡充する。それから 5 番目の前ページの 1 番上 2 学級数は柔軟に対応する。

それから 6) が次のページの現状 7) 市町村や経済団体等との連携を進め地域ニーズに応える。それから 7) はその前のページの現状 6 番を 7 番に、山間部を中心に地域一体としての連携強化を求める。最後は現状 8)、経費削減の問題。この順番でよろしいですか。ご意見ありますか。ご意見がないようですので、この順番で変更していきます。

それでは 3 番、再編案に入ってよろしいですか。はい。それでは再編案の認定にいきます。またここもいろいろご意見があるかもしれませんが。

3、再編案。結果として、特に統合についてはたたき台として県教委の提示した「再編案」にほぼ近い内容で、その後、当たりの「当」を入れてください。内容で当推進委員会として最終合意をみたが、検討過程では地域からの提言も参考にさせていただき、むしろ再編案に拘らず全方位で多角的な検討を進めてきた結果である。従って、現状を踏まえ、将来、特に次代の子どもたちにとって、いかに魅力ある高校であるべきかを前提に議論を進め、結果として再編案に近い形になったが、これは県教委案もそうした検討経過を、専門家としてキチンとにおいて出された内容であったことの証左でもあろう。また第 4 通学区は、他地区と異なり、県内唯一の総合学科高校と、同じく昼間定時制の高校がすでに設置されており、その実績・効果を委員会として把握・確認する中で、多部制・単位制高校への転換等、比較的スムーズに検討できたことを付記する次第である。具体的内容は以下の通りである。ここまででご意見ありますか。

最初時点では、この頭の今読んだところに入れていませんでした。最初から内容の上に、1 校云々からにしまして、ただ結果的に 3 地区終わったときに、その後の新聞とか見ると、何か再編案と全く変わらないじゃないか、みたいなことになったので、そうではなく、結果的にそうだったが、それをベースにそのとおりに、下の確認をしたという意見はありませんということ、入れておいたほうがいいかなということで、ちょっと書き加えた次第です。では、異論等ご意見あるかと思いますがお願いします。

(小口委員)

日本語の「てにをは」を、多少直すだけでございますが、18 行目、これは県教委案が、「も」じゃなくて「が」です。「が専門的データに基づいた論理的なものであったことの証左でもあろう」のほうが、良いかなと思いました。

(中條委員長)

ちょっと待ってください。

(小口委員)

県教委案が、「が」が付きます。

(中條委員長)

「も」じゃなくて、「が」ですね。

(小口委員)

はい。それと、「専門家としてキチンと」は「専門的データに基づいた」や「各種データ」でいいと思います。

(中條委員長)

「これは県教委案が」その後はどうですか。

(小口委員)

「論理的なものであったことの証左でもあろう。」はあったほうがいいです。

(中條委員長)

論理的な。

(小口委員)

「論理的なものであった。」

確認で委員長、1回読んでもらいますか。

(中條委員長)

これは県教委案がそうした検討経過を、「は」が入ってきますか。

(小口委員)

そこは取ってください。

(中條委員長)

これは全部取るのですね。

「県教委案が、専門的データに基づいた論理的なものであったことの証左でもあろう。」ということによろしいですか。

(小口委員)

はい。

(中條委員長)

ここはいらないというご意見もあるかもしれませんが。ほかにご意見ありましたら。よろしいですか。

はい。今のところは、18行目ですが、「これは県教委案が専門的データに基づいた、専門的データに基づいた論理的なものであった。」

(小口委員)

いや、そのように私は言いました。

(中條委員長)

後でまとめますが、「専門的データに基づいた論理的なものであったことの証左でもあった。」それ以外のところはカットしました。

ちょっと後で文章は直します。そこはよろしいですね。次にいきます。

それではその次、第10区までのところです。ここは全部取り出せないで、特徴的なものだけを確認してきて形状しております。

まず、全体ですが、全10区を17校とする。(3校削減する)。次、松本筑摩高校を多部制・単位制高校に転換する(全日制普通科廃止、松本工業高校の定時制統合)。それから3つ目、木曽高校と木曽山林高校をジョイント的に統合する。次、大町高校と大町北高校を統合する。次、白馬高校を中高連携高校とし、白馬・小谷両村立中学校との連携を進める。

もう1つ、県内最初の総合学科高校として、既に実績を上げつつある塩尻志学館高校を、更に充実する。最後、直接言及されないすべての高校に、『魅力付け』の具体的検討を求める。

再編という意味だけでいえば、筑摩、木曽、木曽山林、大町、大町北が、我々としての結論。それと後は志学館をそのまま維持、そのまま総合学科高校として維持するというのが、ある意味、本来での内容になりますが。

ご意見ありましたらお願いします。

(鈴木委員)

2点ですが、3つ目のところで木曽高校と、というところですが、ジョイント的という言葉が一般的に聞いたときに、わかりづらいかなあということで、1番下のほうにも書いてあるので、重複してしまうかもしれませんが、例えば木曽高校と木曽山林高校を両校の校地・校舎を利用して(ジョイント的に)統合する。としてはどうかということと。

1つ飛んで、白馬高校のところですが、ここで中高連携の議論がありましたが、県としてもいわゆる中高連携を、現時点では積極的に進める立場にないという話だったものですから、むしろこのところは、例えば白馬高校を白馬、小谷両村立中学校との連携を進めるなど地域高校としての魅力を高めるとか、あるいは、白馬高校を中高連携(白馬との連携)を進めるとか、というふうにしておいたほうが、もう少し地域や学校の柔軟性を残す点に、なるのではないかなと思います。

(中條委員長)

ほかに、ご意見いかがですか。

(百瀬副委員長)

関連して、今、白馬高校のところですが、この中高連携高校というこの概念が、ちょっとやはり見えないと思うのです。ですから委員長さんはどういうつもりで、こういう言葉を使いましたかというのは聞きたいと思います。

(中條委員長)

概念、「一貫」なのか「連携」なのか、「6年制の学校」なのか、それはこれから検討していただければいいのですが。いずれにしても、この2つの村の子どもたちが、いかに白馬高校に進学するかということを、きちっと考えてもらいたい。そのための中身はともかく連携であるという意味です。

(百瀬副委員長)

そうすると、今、鈴木委員が言われたような形のほうがいいかな、という気が私もします。

(中條委員長)

そうすると、ほかにあえて取り出す必要があるかどうかですね。

議論の中でこのままいくと何年かすると、大町と大町北を統合するという結論に決まりました。そうすると白馬は、「おれたちの高校が残ったからもういいじゃないか」みたいな、ことに本当にならないのかという心配と、我々があえて後で出てきますが、このままいけば分校になりますよ、ということをきちんと明記したほうがよからうというような、委員会の議論になりました。

それを踏まえて、踏み込んでぜひ考えてほしい。全国募集すれば集まるというようなこと、全国募集してもいいのですが、それで2学級が維持できるということで決していないので、佐野坂を越えずにいかにその3分1ではなく、せめて3分2の子どもたちが行くということを必死に考えてもらわないと、分校になりますということの意味で、やっぱり何かほかの高校とは違って、これをすべきではないか、ということであえて努力しました。

内容的には、後にも当然白馬だけではなくてほかにも全部出てきますので、ここにあえて我々の改革プランのひとつとして、取り出す必要はないというご意見があれば、これをカットします。

(百瀬副委員長)

私が言うのは、中高連携高校というこの概念が、受け止める側がこれを読んだ方が、どういう高校かというイメージが、わからないのではないかとということでございます。

(中條委員長)

イメージの話ですね。ほかにご意見いかがですか。

(百瀬副委員長)

ここに記述するのは、結構だと思いますので。

(藤本委員)

この部分を最初に読んだときに、連携型中高一貫校という形態がありますが、それを指していると思ひまして、ちょっと誤解をしたので、この記述はどうでしょうか。



(中條委員長)

別にこれをどうしても書きたいということではありませんから、1 番いい文面に、当然変えていくという意味で。

そうするとさっきの鈴木委員の意見は、白馬高校はここに書くなという前提で、白馬高校は、この後の文章にそのまま、進めるなど地域高校としての魅力を高める。というものが1 案にあります。ほかにご意見ございますか。

(今井委員)

現 20 校を 17 校とする。しかし実際には筑摩が転換して残るわけです。現実には 18 ですね。

(中條委員長)

県の書き方が 76 になっている、それには多部制・単位制が含まれていないので、それと合わせたのでは、たたき台と同じ書き方をすれば、結果は数変わりませんが、20 が 16 になってもいいですが、という意見で我々はまとまっていなかったのですが、たまたまこのような記述になったということです。

(今井委員)

そうすると多部制・単位制の高校は、どういう格好になるのか、残った筑摩に行く生徒さんのことを考えると、ここであまりストレートに、ちょっと行政の思惑を反映していいのかなと。そうであればプラス 1 校を、ちゃんと筑摩高校の存在感を出すために、転換校として 1 校創設とかいう文章を入れていただきたいと思っております。

(中條委員長)

ほかにご意見ございますか。

では、これは省きますか。

(小口委員)

それを取っちゃうといけないと思います。取っちゃうと結論はないわけですから。

(中條委員長)

いや、個別にはその後に全部書いてあります。筑摩高校を多部制・単位制高校に転換する(全日制を廃止する)。それから木曽と木曽山林を統合する。大町と大町北を統合する。いったん事務局に確認し、検討します。

(吉江高校教育課長)

今の今井委員さんのご質問と言いますか、疑義ももちろんのところでございまして、もしもこれそのまま生かすとしたと、現 20 校の全日制、いわゆる全日制ということをして 1 番上の所に、例えば全日制的現 20 校を 17 校とするということで書いていただきますと、下に、松本筑摩高校については、全日制的廃止というようなものが、出てまいりますので、

そんな形でいかがかと考えますが、そのへんを含めてご了承いただければと思います。

（中條委員長）

現全日制 20 校を 17 校とするということです。よろしいでしょうか。

（今井委員）

はい。

（中條委員長）

では、そうしましょう。

（宮川委員）

先ほど、木曽山林と木曽高の話を、中にその校舎を使ってとありますが、木曽高と木曽山林高校を、ジョイント的に統合するだけでいいと思います。後、下に全部説明が書いてありますので、二重になってしまう気がします。やっぱりこういう形のものの、すっきりしていいんじゃないかと思います。

（中條委員長）

鈴木委員の意見を踏まえて、後の文章、両方の校地・校舎を有効的に活用という後に、括弧書きで（＝ジョイント的）と入れたらどうかなと思いますが、ここは文章短くしといたらどうかと。

（宮川委員）

はい。

（中條委員長）

後、こだわりを言うと、ここはちょっと括弧閉じてなくて、下は括弧を付けたもんですが。

（宮川委員）

別に、付けなくていいです。

（中條委員長）

では別に行間の前に、ここは括弧を付けておきます。ほかよろしいですか。

次の個別の高校 10、11、12 の順番にいきます。第 10 区の両括弧のすみませんダブってましたので、右側を取ってください。

第 10 区（1）木曽高校と木曽山林高校を「ジョイント的」に統合する。学科編成が両校異なること、特に山林の演習林等移動が困難な施設・重機等があることから、当面、両方、これ両校に校舎の「校」にさせていただいて、両方の「方」を取って。両校の校地・校舎を有効的に活用することとする。その活用の後に括弧して（＝ジョイント的）という言葉

入れさせていただきます。

それから次のところですが、以後、直ってなかったら修正していただきたいのですが、「妥協的結合ではなく、」これを削除いただいて、統合効果の出しにくい「ジョイント的」統合のメリットを、生かすような積極的な取り組みに期待する。

次、林業科・インテリア科を持つ普通高校としての新たな魅力付けを要望する。

次、「将来」を削除し、今後さらなる少子化の中で、普通科ウエイトを維持するために、特に歴史と伝統ある林業科の維持が困難になりうることも想定し、将来的な林業大学校との連携や専修学校化（高等課程化）については、県教委としての中長期的な研究・検討を要望する。

次、統合後の形態は木曽高校をベースとし、地域中核普通高校と位置付ける。

その次、最後ですが、必要に応じ、名称については、公募などの地元の声も反映など関係者による協議や検討に委ねる。

いったんそこまででもう1回確認すると、私のほうで直したところは、両方の「方」を、校の校舎の「校」にし、両校の校地・校舎を有効的に活用する。この後に括弧として（＝ジョイント的）と入れます。

それから、その次は妥協的結論とありましたが、要は何を言いたいかというと、統合、本当の統合効果を上げるなら、ひとつにしたほうが、効果が上がるのですが、我々はあえてジョイント的という意味で、両方の校舎を結合。そうするとやはり離れているので、統合効果をいかに出すかということ、例えば我々でいうと、大町の統合よりもっと一生懸命踏み込まないと、なかなか効果が出にくいですよということを、少し言いたかったのです。という意味で、統合効果の出しにくいジョイント的統合のメリットを、生かすような積極的な取り組みに期待する。

その次の次です。「将来」を削除して、今後さらなる少子化の中で、ということでその後にもまた、将来的というような言葉が出てきますので、また上を捨ててということです。

（今井委員）

この問題だけですが、普通科ウエイトを維持するためにと、書いてありますが、この「ウエイト」とはいわゆる比率のことですね。

（中條委員長）

そうです。

（今井委員）

できたら、「比率」に直していただきたいと思います。

（中條委員長）

木曽地域は現状でいうと、木曽山林高校が専門校としてあり、かつ蘇南の2学級専門校としてある。それを維持するために、基本的に普通科の学級数が増えなかったというか、少なくなっている。今後少子化を踏まえると、同じように普通科が減っていくことはぜひ避けていくべきだという意味ですが、それをウエイトまたは、比率と表現するか。

(小口委員)

このメリットは、こういったようなことですか。

(中條委員長)

たまたま現状で見ると、ここで言っている意味は木曽高が理数科を入れて4学級です。それから、山林がインテリア、林業で来年度から2学級、計6学級の新しい高校になります。2学級を維持すると考えると、このまま減っていった木曽谷は31年で見えていくと、6学級想定という数字が出てきますので、蘇南に学級実数規模で見たときに、2学級としてこの山林の2学級を想定すると、普通科2学級で本当にいいのか、統合時の選択としてというところも、どうするかということです。

(小口委員)

全部普通科になることはないということですね。

(中條委員長)

逆に、専門学科を維持するために、4学級ある普通科を持っていく可能性がある。さっき言ったように2学級になっちゃうということを、ぜひ避けることが必要だという。

そのあとはちょっと、これは踏み込み過ぎかもしれないかとは思いましたが、いったん我々の検討の中にそういうこともありましたし、かつ議論の中で県教委から、まだ我々の提案について、具体的な検討されていないので、今後とも検討していきたいというのはコメントもいただいたので、それを逆手に取ってと言うと、もしかすると語弊があるかもしれませんが、今後の研究課題として、本当にそれがいいかどうかも含めて、ただ逃げるためにというのではなくて、本当にそれがやり方とかをも踏まえて、ぜひ今後の研究の課題として研究をやりたいということです。

では普通科比率でいいですか。はい。ではそこをそのように変えます。

それから最後、これは僭越だということがあれば取りますがいかがでしょうか。

(鈴木委員)

そのままでいいのはいですか。

(中條委員長)

いいですか。では入れときます。

(百瀬副委員長)

最後から2つ目の「・」の統合後の形態云々という文言ですが、地域中核普通高校という先ほど言った概念についてですが、私自身がちょっとその概念がよくわからないし、今そういう言葉がごく当たり前にわかるような内容ではない気がするのです。ですからこれ何と言ったらいいのかというのは、私自身もよくわからないのですが、その辺がちょっと気になります。

(中條委員長)

おっしゃっている意味はよくわかります。地域中核高校という言い方は我々の議論の中には出てきました。この言葉は、木曽、大町の新校、それから豊科、この3校に使いました。それ以外のところは使ってありません。

別に移動ができるので、別にその地域から出られないということではないですが、その地域のぜひ中核の高校になってもらいたい、というような意見があったように記憶していますのです。

そんな意味でその高校に使いました。ただ別にこれがオーソライズされた言葉でもなければ、それからそういうところは議論が分かれるということであれば、他の高校も同じようにこの文章は取ります。

(宮川委員)

このような書き方になれば、将来的に蘇南高校の普通科がなくなるという、中核の普通高校をどうしても残していけば、林業科やインテリア科を蘇南に持ってくる。そういう形になってしまうと思うのです。

現実には蘇南は普通科で1つ残っていくということですから、この中核高校はいいですが、中核普通科校という表現にはちょっと引っ掛かります。

(中條委員長)

ほかにご意見ございますか。

この表現は、宮川委員がおっしゃるようなそういう意味では決してございません。

地域校は地域校で選択の幅というのは。

(宮川委員)

おそらく、現にわかっていると思います。

(中條委員長)

では取りますか。意見が分かれるのであれば、それはむしろ取るべきだと思いますが。

(百瀬副委員長)

形態は木曽高校をベースにし、この文章がこれが、どういうことが、「らしさ」ということかが。

(中條委員長)

ジョイント的ですから、両方が同じウエイトではない。例えば校長先生は木曽高校にいるのかもしれない。どっちをベースにするのかという意味です。要はたたき台は、木曽山林をベースとし、木曽高校を統合する。かつ校地・校舎を両方使うという書き方ですので、我々はそうではない案を選択したわけですから、それでいくと、現木曽高校をベースとするというのは、その次がなくても書いておかないといけないと思います。

（百瀬副委員長）

最初の「・」では、校地・校舎を当面両方使うということだけ、書いてあるわけです。それを少しはっきりと、木曽高校ベースということをここで書いたと、そういうことです  
ね。

（中條委員長）

はい。そのさらに前で言うと、木曽高校に木曽山林高校を、とは書いてありませんので、AとBをジョイント的に統合すると書いてあるのです。

実際に、そういう我々以前に、1回議論して結論付けをしたのですが、終わってからそういう意味合いで申し上げたら、「いや、木曽をベースにするなんて、議論ありましたか」という質問があったので、そこはちゃんと確認したほうがいいということで、その後の委員会でそれは確認させていただきました。それと同じようなことをやっぱりここにも織り込む、書いておいたほうがいいかなという意見です。

（百瀬副委員長）

いいですか、そうすると最初の「・」の次のところへ、それを持っていってもいいかな  
あとと思います。

（中條委員長）

「ベースとし」という文章を取らないとだめですか。

（百瀬副委員長）

ええ。最初の「・」のところで中にまとめちゃってもいいと思います。

（今井委員）

その辺のまとめで、やっぱりこのところには持っていかに、結論を打ち出しておかないといけな  
いという案です。もうちょっと文章的に、どうかわからないのですが、この表題のところを、3  
ページのところの1番下から3行目、木曽高校と木曽山林高校をジョイント的に統合すると、な  
っています。「てにをは」の問題ですが、ここの木曽高校へ木曽山林高校をジョイント的に統  
合する、という表現を入れておくということと、ベースをというそういうようなところで。そ  
こは正直言って、ここが1番県教委が出したたたき台と、違うところがございますので、そこ  
はやはりこだわって表現しておきたいなと思います。

（中條委員長）

皆さんの思いは、いかがでしょうか。

（小口委員）

今のところ新設校と名前を公募と一緒に書いてあるので、そうすると吸収と同じですね。

(中條委員長)

そのように思われないような記載を…。

(小口委員)

それは書いてありますね。

(中條委員長)

そういう意味もあって、「に」ではなくて「と」にしてあって、ただ「と」というと両方同じウエイトですかということ、そうではなく、我々は普通学級数の何なのかという説明を踏まえ、木曽高をベースに木曽山林の校地・校舎を有効的に活用を、ぜひしてほしいという趣旨です。

(宮川委員)

順番は別としてこれでいいと思います。

(中條委員長)

いったん(1)のところは、「木曽高校と」とそのままにさせていただくとして、その後に入れたほうがいいか、もしくは独立してその後の「地域中核高校」を取った上で、統合後の形態は木曽高校をベースとするというのは、独立して残しておいたほうがわかりやすい。どうでしょうか。

(小口委員)

確かに2番目に入れたほうがわかりやすいです。

(中條委員長)

2番目ですか。

(小口委員)

2番目の「・」に。

(中條委員長)

最初のところには。

(小口委員)

ですから移動しますよね。この中に入れたほうがいいと思います。

(中條委員長)

学科編成が両校異なること云々という文章の中に、それを入れてしまってはどうかという意見か、もしくはそのまま残しておいたら、かえってはっきりするのではないかという意味で、残したらどうかという、どちらでしょうか。

(小口委員)

こっちに入れたほうがいいと思います。

(中條委員長)

はい、ほかの皆さんよろしいですか。1 つ目は、それでよろしいでしょうか。後で文章考えるとして、(1)の統合するのあとの、学科編成が両校異なる云々の中に、「統合後の形態は木曽高をベースにし」という文章を入れることにします。文章はちょっと時間節約で、次回それを組み合わせますということにします。

「地域中核普通高校」これはカットでよろしいですか。よろしいですね。これは、大町と豊科からも取ることにします。

続いて蘇南です。(2)蘇南高校は現行の総合選択制を「ミニ総合学科」的にさらに拡充する。通学圏に鑑み学級数いかににかかわらず、将来にわたり存続させる必要がある。学科編成は将来的にも進路選択肢の幅を維持すべく、普通科1学級、商業科・工業科(電気)各1学級規模、合計3学級とする。地域性に鑑み、域内の各中学校との中高連携を検討する。最後ですが、小規模校化が避けられぬことから、むしろそれを逆手に取った取り組みに期待する。

それからその次の少人数コース、これはある意味蘇南に関係していることですが、項目立てとして取り出しました。読み上げます。

(3)少人数コースもしくは、/で学級の検討。他エリアへの流出が少ない、当然生徒数の減少が厳しい地域であることから、将来子どもたちの進路選択の維持運営・拡充(普通科のこれも比率ですか、ウエイトを維持しながら商業科を存続)のため、小規模、「高」ではなく学校の「校」ですが、小規模校限定での少人数学級や県としての財政的支援を踏まえての少人数コース制の導入、「導入」を入れました、導入検討を要望する。ここまでで、ご意見あればお願いします。

少人数コースのこれは、蘇南で議論あったのですが、将来蘇南に限定する必要が、もしかしたら無くなる可能性というか危険性、とりあえず、さっきの備わった林業科、インテリア科それとも関係してくるので、あえて短所を取りまして項目の順番。ここの中高連携はなくてもいいということもあると思いますが。

(宮川委員)

何だかすっきりさせたほうが、私はうれしいです。

(中條委員長)

そうですか。ここはよろしいでしょうか。ではこのままにします。最後、木曽の最後です。

(4)木曽は他地域への流出が非常に少ないこと、これは「。」じゃなくて「、」に直します。読点に直します。また2校の校を、「高」から学校の「校」に直していただきます。また2校で且つ10中学という限られたエリアであることを、地域としてむしろ逆手にとっての地域連携強化(含む中高連携としての教育内容や町村教育委員会との調整を踏まえての専科教員兼任等)に期待する。



ご意見ありますか。よろしいでしょうか。はい。次にいきます。

次、第11区。(5)南安曇農業高校と穂高商業高校は、専門校の「高」ではなく学校の「校」という指摘が見つかりましたので、よろしいですね。きのう確認いただきました。

(西牧主任教育支援主事)

「専門校」ではなく、「専門高校」です。

(中條委員長)

「専門校」ですか。この前の指摘は専門校、「高い」ではなく学校の「校」に変えてほしいということだったのです。ここは「専門高校」ですか。

(西牧主任教育支援主事)

はい。

(中條委員長)

では、そうします。他もそうになっていますか。

(西牧主任教育支援主事)

はい、なっています。

(中條委員長)

専門高校として存続させる。将来更なる小規模校化が懸念されないわけではないが、それぞれ資格取得の実績やコース変更等、これまでの農業や商業にとらわれず、新しい試みが実践されつつあること、また専門高校、ここも同じです、は小規模であっても、むしろそのコンパクトさを生かしたきめ細かな、ほか「ひらがな」になっているのでここは「ひらがな」にしてください。きめ細かな教育効果を期待し得ることから、現状のまま存続させることとする。

続いて、また将来的にバイオテクノロジーや大規模農業法人、情報化社会等、地元企業との連携による地域ニーズに応えた取り組みを検討を期待する。以上先に、周りの骨格のところで、ご意見が。

(百瀬副委員長)

2つ目の「・」の情報化社会等という、この辺がちょっと意味がよく私わからないのですが、バイオテクノロジーや大規模農業法人、情報化社会等、地元企業との連携。連携というのはどこから前なのか、ちょっと具体的に、その辺を教えてください。どのようにするのか。

(中條委員長)

どことの連携という意味ですか。

( 百瀬副委員長 )

ですから「バイオテクノロジー」は、どこへ係るのですか。

( 中條委員長 )

「地元企業」に係ります。

( 百瀬副委員長 )

地元企業。バイオテクノロジーそれから大規模農業法人、これも地元企業に係る。

( 中條委員長 )

言葉を付け足すと、今後のバイオテクノロジーだとか大規模農業法人だとか情報社会等を踏まえて、地元企業との連携によるという意味です。

( 百瀬副委員長 )

踏まえて。するとそういう言葉を補っていただかないといけないと思います。

( 中條委員長 )

はい。

( 百瀬副委員長 )

そうすると踏まえてというのはそれで次、このバイオテクノロジーや情報化社会の、進展してというようなことですか、と踏まえというのはわかりますが、大規模農業法人を踏まえるというのは、ちょっと意味がわからなくなるもので、その辺はどういうつながりになっているのですか。

( 中條委員長 )

言いたかったのは、農業に未来がないということでは決してないということで。カゴメや、松本のゴールドパックなどの企業がありますが、企業が農業をアグリビジネスとして、取り込もうとしていますので、そういったところとの将来進路選択とか就職先としての連携や、農業も個人商店ではなく、今、田んぼがいっぱい余っていますから、それを大規模にすることによって、就職先としてのニーズも生まれないかとか、商業も、読み書きそろばんの簿記だけではなく、やっぱり情報リテラシーというものと、きちっと連携をとることによって、地元だけではないニーズにこうやっぱり合致させないと、学校の教育内容とその地元の経済だけで走っていけるのも、実態とこうある意味、かけ離れてきていませんかという指摘もありましたので記載しました。

( 百瀬副委員長 )

わかりました。では、次のようにしたらいかがでしょうか。バイオテクノロジーや情報化社会の進展等を踏まえ、大規模農業法人など地元企業との連携による…。

（中條委員長）

今、具体的な大規模農業法人があるわけではありません。今後そういう可能性があると思っていますが、ですから取りましょう。

（百瀬副委員長）

ですからバイオテクノロジーや情報化社会というのは、ひとつの技術なり社会なりがこれから進展していくという、そういうことだと、大規模農業法人というのはどこか企業ってというのは、そういう個体ですよ。ですからそのままちょっと、「ごちゃごちゃ」と言っただけは失礼ですが、そういうことじゃないかと思うのです。ですから、その辺がわかるように、表記をしたほうがいいかと思います。

（中條委員長）

「将来的にバイオテクノロジーや情報化社会等の進展を踏まえ、地元企業との」という記載でよろしいですか。

（百瀬副委員長）

そうですね。

（中條委員長）

はい。ではそうします。

（百瀬副委員長）

農業法人がなくてもいいかもしれません。

（中條委員長）

言いたいのが、要は地元の連携を高めてくださいということと、これから農業にも商業にも転換というか、形や中身を変えて、未来がありますよということを、言いたいと思っています。取ります。

（百瀬副委員長）

ありがとうございます。

（中條委員長）

続いて、（６）明科高校の魅力づくりの一層の進展を期待する。地元進学が少なく都市部からの進学者が多い現状から、その将来展望を危惧する声があったことを学校・地元関係者は大いに認識し、地元の子どもの進学希望が高まるよう、規模を追わず中規模校としての魅力づくりを強く要望する。以上です。

まず、前提は全部の高校をできるだけ書きたかった。統合対象だけにとどまらずという意味です。ただしまとめて周辺校や都市部校とまとめているところもあります。

明科については前回でしたか議論があって、ちょっと方向付けまでいきませんでした、

その後の資料とも見させていただく中で、後に記載してあったと思いますが、要は白馬よりも地元進学率、進学者が少ない。

ただし先ほど冒頭、事務局からご説明いただいたように、いろんな子どもたちの「砦」になっているところもある。やっぱり地元という意味では、1 番新しくできた高校ですから、古くからある高校との取り組みから比べれば、やっぱり地域との一体感という情勢は、まだ歴史経過の中では、もっと頑張る必要もあるだろうということで、あまり学級規模、今 4 学級で普通科の体育コースですか、それは卒業はこれからということで、まだ成果がこれからという意味もあって、ぜひこう頑張ってほしいなという意味です。

（鈴木委員）

これを記載することについては、否定ではありませんが、次のページの 14 のところですが、ここに 11 区の相対的な意見といいますか、11 区は松本筑摩だけが今回の再編案に引っ掛かっていて、というくだりがあります。このところを最初に入れて、私の思いは今の明科のこともそうですし、前回松本筑摩の 3 学級分を、どこへやるかという問題について、県教委に任せるといようなそういう結論になってしまっていますが、その辺のひとつの理由には、松本筑摩には大北からも、入学生はいないじゃないかと話があったと思うのです。

ただ特に 11 区松本平、松塩地区においてはやっぱりいわゆる不本意入学と、いうことも先ほど出ましたが、いわゆる輪切りによる高校格差はあると思います。

そういう中で、例えば明科高校にも明科町の子が必ずしも行かなくても、十分通学範囲があるわけですから、その中でランク付けが行われる。松本筑摩も同じような形で、結果的に明科の町の子どもも自由に移動し、北から流れてきた子に押されて松本筑摩に、市内から漏れていくという構図がやっぱりあると思うのです。

明科についてこのように書いていくことは、励ますという意味では、とてもいいことだと思いますが、その前に我々の立場として、11 区の 14 にあるところを最初に持っていきながら、最後のところは私の判断ですが、「またこれらの状況を満たしている高校から格差の問題についても、関係者は関心を持つことを期待したい」という本文を入れながら、こういう実態を認識しながらも、なおかつ期待をしてこういう言葉を言っているんだという主旨を明らかにしたほうがいいと思います。

（中條委員長）

ほかのご意見はいかがですか。

そうは言ってもやはり地元の高校は、地元の子どもたちが行く。なぜかというと辰野高校がやっぱり学校評議員などに、すんなり取り組んだ理由は、やっぱり地元の子どもたちが来ないということに危機感をもっている。その結果地元の子どもたちが進学校などでもしかしたら、辰野高校に行かなくて、清陵に行ったらそれは全然構わないのだが、やっぱり地元の子どもたちも来てくれる学校に行こうという取り組みは、結果論というのではなく、重要だと思います。

従ってそういう意味で今そういう状態にあれば、やっぱり地元の子どもが行かないって、この前もどなたかおっしゃっていましたが、篠ノ井線に乗って見たら、保護者もいる、中

学生もいる、小学生も乗って見たら、行きたくないとなっているかもしれない。それが別に明科だけではない。もともとは大系線っていうお話からスタートした部分もあるかもしれないです。

別に形式すぎているか、見た目だけをよくすればいいということでは決していないのですが、やっぱり心持ちが体、外に現れるということからすると、やっぱりそういったことも含めて、ぜひ子どもたちが地元の子が「お兄ちゃんの高校、あのお兄ちゃんの高校に行きたいよね」となってほしいなと思います。

やはり地元もこの前の話、ピーク時は「オラが町に学校をつくるからぜひ来てくれや」って言って、生徒が減ってくるとそういう動きといたしますか、熱が冷めてくるということにやっぱりなってほしくないと思います。

それは別として、確かに11区は結果的に再編という言葉を使わせていただければ、松本筑摩の多部制・単位制への転換、それを中心にした部分だけになります。そういう意味で14番、文章はもう1回次回以降確認したとしても、14番は頭に持っていったほうが、いいのではないかという今のご意見ですが、これについていかがですか。よろしいですか。ではいったんそうさせていただきます。

そうしますと、11区と12区、それから多分実施時期についても、1番全体の議論を踏まえては書いたつもりではありますが、たぶんいろいろご意見あるかと思いますので、次回残りの部分を、確認させていただきたいと思います。あと掲載項目については多少、次回以降、もしかしたら通学区との兼ね合いの中でまとめ方変わるかもしれませんが、その辺はご了承いただきたいと思います。

では事務局から次回の予定等お願いします。

（西牧主任教育支援主事）

お願いします。次回の日程でございますが、1月14日（土曜日）午後2時半から予定をしております。なお会場につきましてはまだ確定しておりませんので、確定次第改めてご連絡申し上げたいと思います。

（中條委員長）

14日は午前中には北信地区が12時半まであるようですので、それが終わってから事務局が駆けつけてこられるということで、ちょっと開始時間が遅くなっていますが、よろしくをお願いします。ほか何かございますか。よろしいでしょうか。

（百瀬副委員長）

先ほど回ったものによると、最終回という予定になっておりますが。

（中條委員長）

今のところその予定でございますが、終わるかどうかわかりません。

( 百瀬副委員長 )

そうですね。事後の修正等もあれば、あるいはもう1回やらないといけない可能性もありますね。

( 中條委員長 )

一応これまで伺っているのは、1月中旬ぐらいまでには何とか、と聞いていますので。ほかの推進委員会では、昨日、一昨日ですか、第1と第2が確かやっていますが、まだ報告書の中身の議論に入っていないように聞いております。

従って4つある推進委員会の中で、我々が最初に、報告書の中身まで確認する会を今回持っているんですが、それについて要は、次回以降まだできるのか、その辺のまとめ方等ほかの、我々だけがここの締めに行っているというふうにいきませんので、そのスケジュール等考え方について現状、状況の報告いただければと思います。いかがですか。では、お願いします。

( 吉江高校教育課長 )

今、お話にございましたように、一昨日北信の推進委員会がございまして、北信の推進委員会は、とりあえずあと1回実施するという事で、その中で必要があればもう1回ぐらい開催する必要があるのかなと、というような話になっております。

それで前々から第三、南信の推進委員会につきましては、これは実は私どものほうの候補案で、当初考えていなかった旧通学区毎に1校対象という状況の中で議論していただいておりますので、ここはどうしても今月末までかかるというふうな、お話になっております。

それで第二推進委員会、東信ですが、これは今日午後これから実施されますので、ちょっと状況ははっきりいたしません。私ども基本的には、初中旬ということでお話しておりますので、次回が14日ということであれば、おおむねその近辺というような気持ちはございます。ただしかしながら、次回の14日で、方向性がどうしてもまだもう少し時間が必要だということであるとすれば、こちらの第四推進委員会は、今の委員長さんからお話にございましたように、ほかの地域に比べますとかなり進行しておりまして、もう詰めの段階になっておりますので、状況の中で、もうどうしてもあと1回ということであれば、お願いできるとすれば、できるだけ早い時期での開催という前提で、もう1回の開催ということもやぶさかではないかと、考える次第でございます。

( 中條委員長 )

それについての皆さん方は、よろしいですか。

( 百瀬副委員長 )

特に言うことはないです。

(中條委員長)

皆さん含めてやるほうも大変なので、別に拙速に進めるつもりは全くありませんが、ちょっと半分までできたので、できたら次回残りの部分について、できるだけ詰めをさせていただければ、という前提でおりますのでよろしくお願いします。もし、そこで質問がなければ、その1回をどうするかということの確認、検討を次回いただきます。

それからいったん回したものは、いったん次回の前提になりますが、それはよろしいですね。ということで、年明け早々ということで、場合によっては毎週のように後1、2回やる必要も、もしかしたら出てくるかもしれませんが、いずれにしてももう後半に来ておりますのでご協力をよろしくお願いいたします。

以上をもちまして第16回推進委員会を終了にしたいと思います。